財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第８集

下　郷　遺　跡

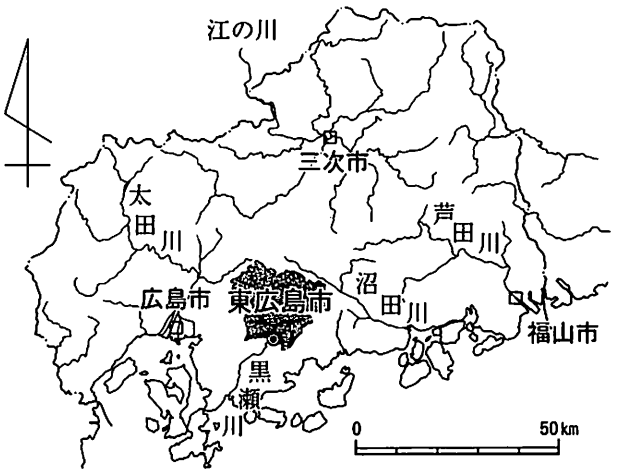
東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

２００４

財団法人　広島県教育事業団

下　郷　遺　跡

東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

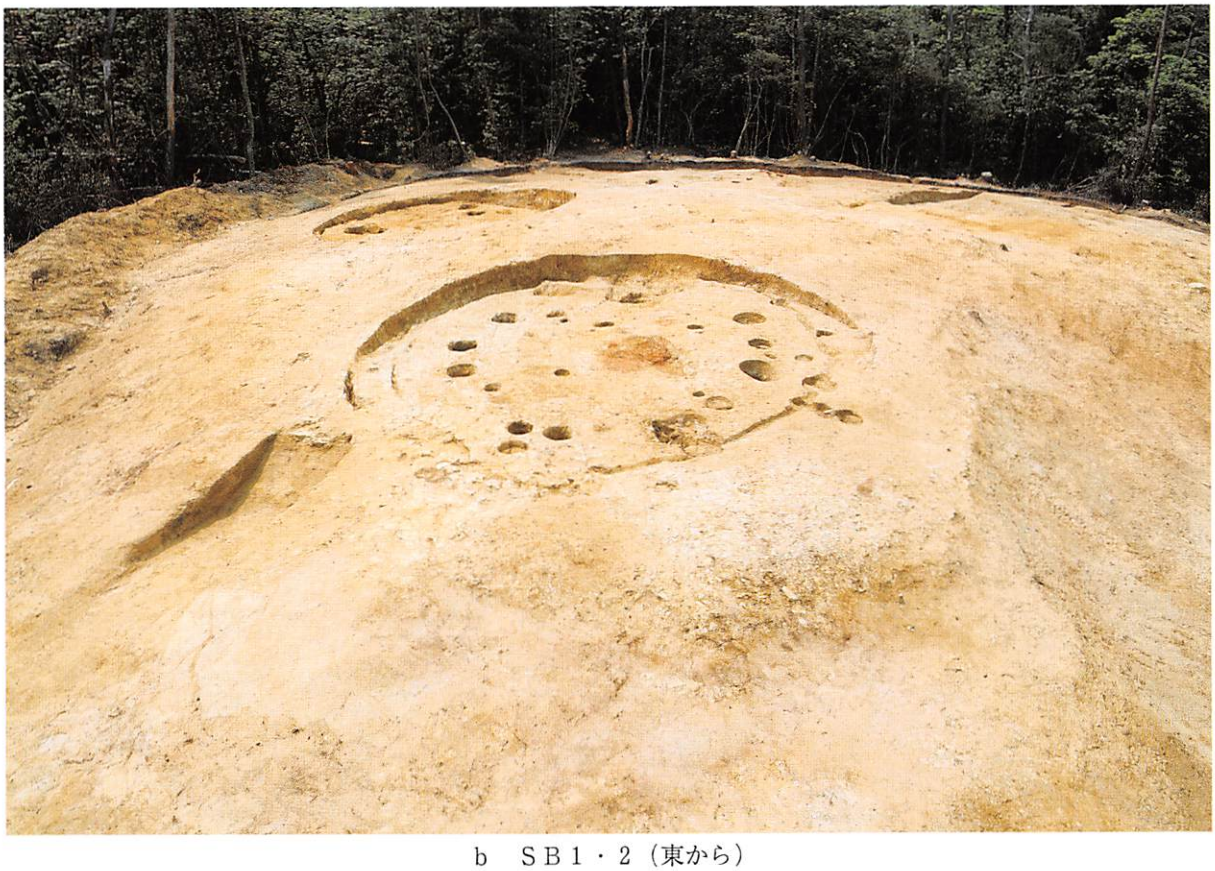


東広島市位置図（◉は遺跡を示す。）

2004

財団法人　広島県教育事業団

a　遺跡全景（空中写真，北上空から）



b　ＳＢ１・２（東から）

巻頭図版 2

a　ＳＢ２・３（南から）

b　ＳＢ３土器出土状況（南から）

a　ＳＢ３出土土器（29・31・32）

b　ＳＢ１出土砥石（19・20）

例　　言

1．本書は，平成15（2003）年度に実施した東広島呉自動車道建設事業に係る下郷（しもごう）遺跡（東広島市西条町大字馬木所在）の発掘調査報告である。
2．発掘調査は，国土交通省中国地方整備局広島国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
3．発掘調査は梅本健治が担当した。
4．出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は，梅本が行った。
5．本書は，梅本が執筆・編集した。
6．本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。
　ＳＢ；竪穴住居跡，ＳＸ；性格不明の遺構
7．挿図の遺物番号と図版の遺物番号とは同一である。
8．本書に使用した北方位はすべて真北である。
9．第１図は国土交通省国土地理院発行の１：25,000の地形図（清水原）を使用した。
10．出土した石製品の石材は，考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… (1)

Ⅱ　位置と環境 …… (3)

Ⅲ　調査の概要 …… (8)

Ⅳ　遺構と遺物 …… (10)

Ⅴ　まとめ …… (31)

巻頭図版目次

巻頭図版1　a　遺跡全景（空中写真，北上空から）　b　ＳＢ１・２（東から）
巻頭図版2　a　ＳＢ２・３（南から）　b　ＳＢ３土器出土状況（南から）
巻頭図版3　a　ＳＢ３出土土器（29・31・32）　b　ＳＢ１出土砥石（19・20）

挿図目次

第１図　東広島呉自動車道路線図 …… (1)
第２図　下郷遺跡周辺遺跡分布図（１：25,000） …… (5)
第３図　周辺地形図（１：2,000） …… (9)
第４図　遺構配置図（１：200） …… (11)
第５図　ＳＢ１実測図(1)（１：60） …… (13)
第６図　ＳＢ１実測図(2)（１：30，１：60） …… (14)
第７図　ＳＢ１出土土器実測図（１：３） …… (15)
第８図　ＳＢ１出土鉄器・石製品実測図（１：２） …… (16)
第９図　ＳＢ２実測図（１：30，１：60） …… (18)
第10図　ＳＢ２出土土器実測図（１：３） …… (20)
第11図　ＳＢ２出土石製品実測図（１：２，１：４） …… (20)
第12図　ＳＢ３実測図（１：30，１：60） …… (23)
第13図　ＳＢ３・調査区内出土土器実測図（１：３） …… (25)

第14図　ＳＢ３出土石製品実測図（１：２，１：４）……（26）
第15図　ＳＸ１・３～５実測図（１：60）……（27）
第16図　ＳＸ２実測図（１：60）……（28）
第17図　ＳＸ２出土古銭拓影（２：３）……（28）

表　目　次

第１表　遺物一覧表……（30）
第２表　竪穴住居跡一覧表……（31）

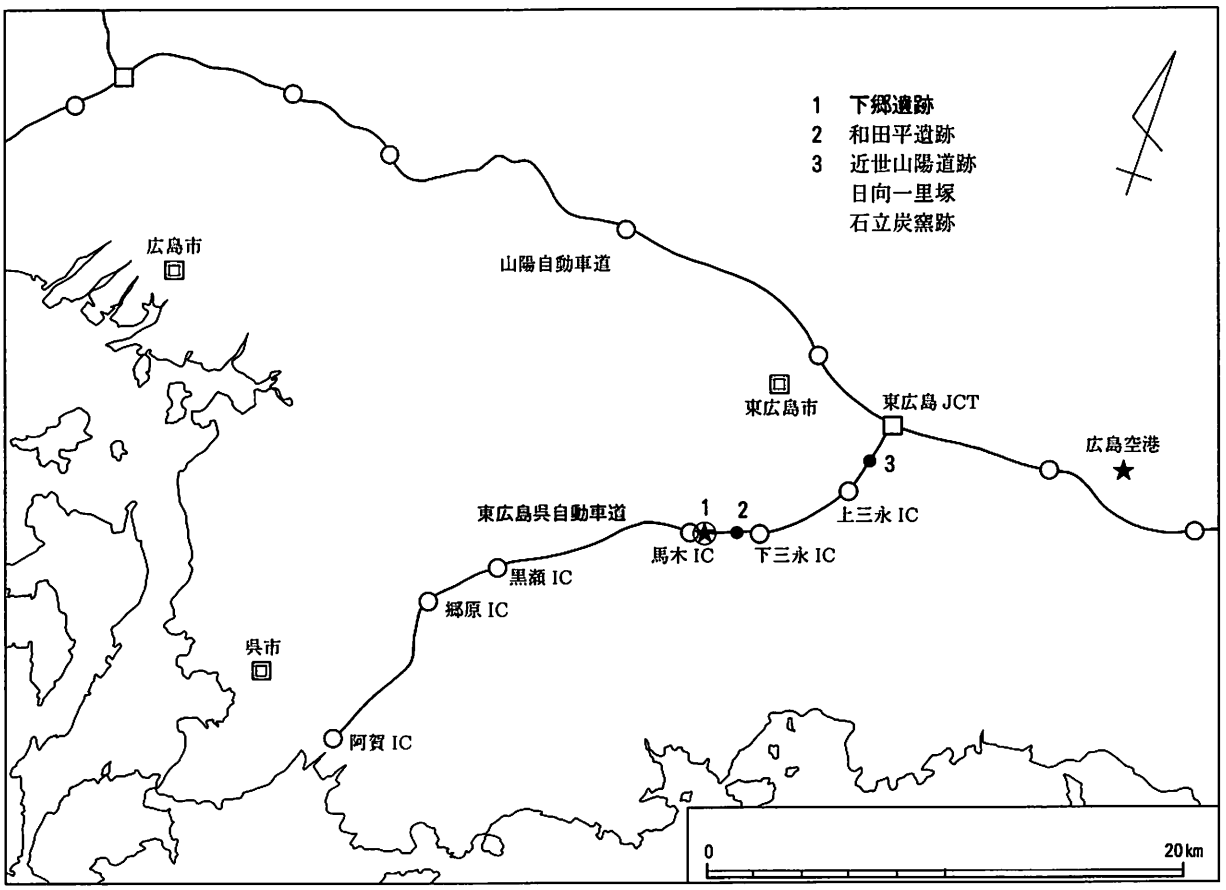
図版目次

図版１　a　遺跡遠景（西から）
b　遺跡遠景（空中写真，西から）
c　遺跡近景（空中写真，西から）
図版２　a　遺跡近景（空中写真，北から）
b　遺跡全景（空中写真，北から）
c　遺跡全景（空中写真，西から）
図版３　a　遺跡全景（空中写真，西から）
b　ＳＢ２・３（南から）
c　ＳＢ３・ＳＸ群（東から）
図版４　a　ＳＢ１（北から）
b　ＳＢ１（東から）
c　ＳＢ１炉土層（西から）
図版５　a　ＳＢ２（東から）
b　ＳＢ２（北から）
c　ＳＢ２土層（北から）
図版６　a　ＳＢ３（南から）
b　ＳＢ３（東から）
c　ＳＢ３床面検出状況（南から）
図版７　a　ＳＢ３土層（南から）
b　ＳＢ３土器出土状況
（29・31・32，南から）
c　同　　上（東から）
図版８　a　ＳＸ２（南から）
b　ＳＸ２（北から）
c　ＳＸ２土層（北から）
図版９　a　ＳＢ２Ｐ７礫出土状況（西から）
b　ＳＢ２Ｐ９検出状況（東から）
c　ＳＢ２Ｐ９完掘状況（東から）
d　ＳＢ３土器出土状況（33，南から）
e　ＳＸ１（南から）
f　ＳＢ３土器出土状況（34，南から）
g　ＳＸ３・４（南から）
h　ＳＸ５（南から）
図版10　出土遺物(1)
図版11　出土遺物(2)

Ⅰ はじめに

下郷遺跡の発掘調査は東広島呉自動車道建設事業に係るものである。本事業は，広島広域都市圏東部の東広島市と呉市を結ぶ一般国道375号沿線地域を高規格幹線道路で結ぶことによって，広島中央テクノポリス地域として開発が進みつつある当地域のより一層の発展を期するために計画されたものである。

建設省（現・国土交通省）中国地方整備局広島国道工事事務所（以下，「建設省」・「国土交通省」という。）は，平成７（1995）年２月，当該事業地のうちⅠ期工事分の山陽自動車道から分岐する東広島 J.C.T（東広島市高屋町大字溝口）から馬木 I.C（同市西条町大字馬木）までの間の用地内における文化財等の有無及び取扱いについて，東広島市教育委員会（以下，「市教委」という。）と協議した。市教委と広島県教育委員会（以下，「県教委」という。）はこれを受けて現地踏査を行い，同年７月及び平成８（1996）年１月に建設省に，事業地内に遺跡３か所（山城２・古墓１）と試掘調査が必要な箇所が30か所存在する旨を回答した。その後，県教委・市教委は随時試掘調査を行い，和田平遺跡・日向一里塚・近世山陽道跡・石立炭窯跡などの遺跡を確認

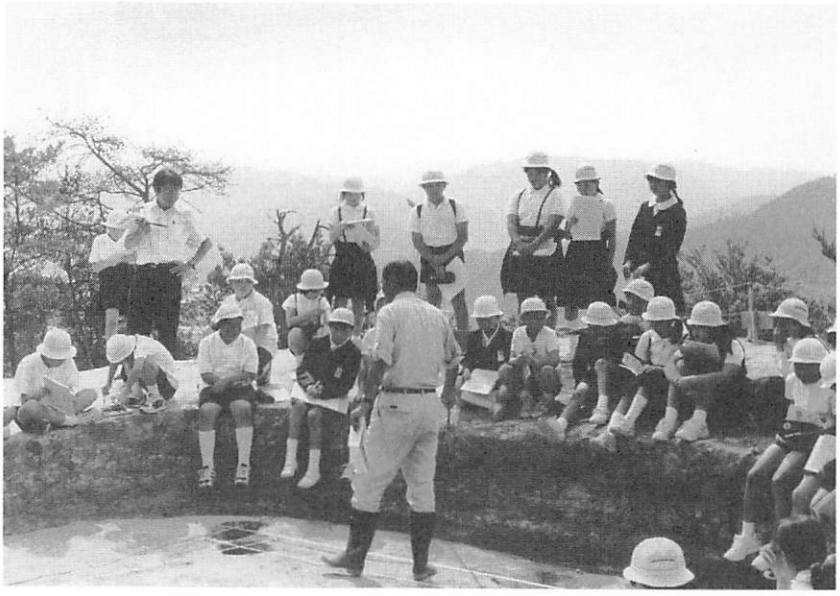


第１図　東広島呉自動車道路線図

した（これらはいずれも平成12～14年度に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が実施され，報告書も刊行されている）。下郷遺跡は平成14（2002）年に試掘調査が実施され，遺跡の確認が行なわれた。これを受けて，国土交通省は平成15（2003）年２月４日付けで財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（現・財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室，以下「教育事業団」という。）に下郷遺跡（1,000㎡）の調査依頼を行なった。国土交通省と教育事業団は平成15（2003）年４月１日付けで委託契約を結び，同年４月７日から５月23日までの約１か月半発掘調査を行った。なお，５月17日には東広島市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し，約100名の参加があった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局広島国道事務所，東広島市教育委員会，財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。



東広島市立板城小学校６年生の遺跡見学

Ⅱ　位置と環境

下郷遺跡は広島県中南部に位置する東広島市の南端，賀茂郡黒瀬町との境付近に所在する。東広島市は北西部の志和盆地，北東部の高屋盆地，そして中央部から南部にかけて県内でも最大規模の西条盆地が広がり，周囲を安駄山，金明山，野路山，洞山，蚊無奥山，水ケ丸山などの標高400～700m級の山塊が取り囲む。志和盆地と西条盆地の間は北東－南西方向に連なる曾場ケ城山，深堂山，虚空蔵山などの標高500～600m級の山々で画される。東西12km，南北10kmのほぼ円形の西条盆地（平均標高210m）は「西条層」と呼ばれる蛇行河川の堆積物に起因する砂・シルト・礫が厚く堆積する第四紀洪積層から成り，その基盤は黒雲母花崗岩・流紋岩・花崗斑岩などで形成される。この西条盆地の中央を盆地北西部の並滝寺池に発した黒瀬川が諸支流を集めながら南に流れ，下郷遺跡西側眼下で南流する松板川を併せて黒瀬盆地を東から西に抜け，やがて呉市阿賀港で瀬戸内海に注ぐ。

西条盆地は耕地2,000ha を抱える県内屈指の穀倉地帯であるが，周囲の山塊が花崗岩帯で滞水性に乏しい。そのため，立木の生育が良好でなく，水源の涵養も好ましくないので，市内には多くの溜池が作られている。盆地の北側を東西に山陽道が通り，また瀬戸内沿岸へ谷沿いの道が四方に通じていることから，古来安芸国の中心として栄え，国分寺・国分尼寺跡や中世における周防大内氏の安芸攻略の拠点である鏡山城跡をはじめ，各時代の集落跡や墳墓など多くの文化財が残されている。しかし，下郷遺跡の位置する盆地南部は水利条件などが劣悪で，近世末期まで三升原や柏原といった原野が広がる生産力があまり高くない地域であり，そのために中近世の墓や城跡，集落跡などは散見されるものの，古代以前の遺跡は皆無に近い。よって，ここでは黒瀬町の遺跡を含めて西条盆地南部の歴史的環境について述べる。

旧石器時代・縄文時代　西条盆地中央の鏡山丘陵一帯では旧石器・縄文時代の遺跡が集中的に見つかっている。後期旧石器時代から縄文時代早期の平地式住居跡を検出した西ガガラ遺跡[1]をはじめ，縄文時代早期の集石炉などを検出した鴻の巣遺跡[2]，縄文時代中期の平地式住居跡が見つかった山中池南遺跡[3]などがある。また，上三永の日向一里塚[4]や福本の和田平遺跡[5]では遺構には伴わないものの縄文時代後期の土器や石鏃をはじめとする石器が比較的まとまって出土した。

弥生時代　東広島市域の北半部では高屋町の西本遺跡群[6]・東広島ニュータウン遺跡群[7]をはじめとする弥生時代後期を中心とした時期の規模の大きな集落跡・墳墓群が多く見られるが，黒瀬川が浸食した開析谷の北縁に立地する西東子遺跡[8]から南側には弥生時代の遺跡はみられない。西東子遺跡では弥生時代中期の掘立柱建物跡２棟・貯蔵穴１基などを検出している。

黒瀬町北部の岩幕山山麓遺跡[9]は，標高352.5mの岩幕山から東北東方向に延びた丘陵南斜面の裾部に立地し，長径9.1m×短径7.2mの平面長円形の竪穴住居跡を検出している。10本柱で，北半部を中心に焼土と炭化材の広がりが見られ，焼失家屋とみられている。

古墳時代　西条盆地南半部では横穴式石室をもつ福本の城平山古墳以外には遺跡が知られていない。黒瀬町では，岩幕山山塊の南東麓に宗近柳国古墳群（３基）がある。山陽新幹線建設に伴って調査が行われた第１・２号古墳[10]はいずれも径10mほどの円墳で，第１号古墳は推定の長さ2.1mの竪穴式石室，第２号古墳は全長3.55mの横穴式石室を埋葬施設としていた。第２号古墳の横穴式石室は西側壁を失っているが，東側壁には石を突出させて羨道と玄室を画する袖を形成している。玄室床面全体に数cm大の円礫を雑然と敷き，閉塞石もみられた。これら２基の古墳は６世紀後半の近接した時期に築かれているが，竪穴式石室の方がやや先行するとみられている。第３号古墳（岩幕山古墳[11]）は径15～16mの比較的大型の円墳で，現存長4.0mの横穴式石室を埋葬施設とする。西側壁がやや胴張り気味で，玄室と羨道の境は不明確である。玄室の床には10数cmの大きさの礫が敷かれ，羨道には部分的に閉塞石がみられた。棺台石の周囲ではガラス製小玉が比較的まとまって出土した。この古墳からは他に須恵器の杯蓋・壺，鉄刀・鉄鏃・馬具（鈴具）が出土しており，６世紀後半に構築されたとみられている。この他，保田古墳群は横穴式石室をもつ円墳４基からなる。

古代　日本地理志料によれば，東広島市馬木地区は律令制下黒瀬町や呉市郷原町とともに賀茂郡訓養郷に含まれ，その北端に位置している。この時期には，西条盆地の北半には国分寺・国分尼寺が築かれ，古代山陽道が東から西に宇鹿駅（高屋町郷に比定）－木綿駅（西条町寺家の夕作に比定）－大山駅（八本松町宗吉の大山峠付近に比定）と通り，政治・交通の要衝であった。これに対して，西条盆地南半にはこの時代の遺跡は明確なものはないが，郷曽の石神八幡遺跡は巨石を対象とする祭祀遺跡と考えられている。

中世　中世の東広島市域には，国衙領の東条郷・西条郷，上西門院領の志芳荘，大炊寮領便補保の高屋保，新院御方別納御料所（のち厳島社領）の造果保といった公領や荘園が存在した。鎌倉時代に志芳荘は伊豆国天野氏，高屋保は出羽国平賀氏がそれぞれ地頭となり，造果保は南北朝時代に厳島神社と沼田小早川氏の一族である小泉氏との間で所領争いが起き，幕府の裁定で小泉氏の手に帰したが，15世紀末までには平賀氏の領有となった。このように，志和盆地・高屋盆地などの市域北部では天野氏・平賀氏といった有力国人が鎌倉時代から戦国時代にかけて存在した。しかし，国衙領を主とする西条盆地では西条氏一族など在庁官人系の中小豪族の存在はみられるものの，有力国人は成長しなかった。この東条郷・西条郷と呼ばれた西条盆地一帯は南北朝時代には「東西条」と称されるようになる。そして，14世紀後半になるとこの東西条に周防大内氏が侵攻し，以後，16世紀半ばに滅亡するまでほぼ継続して大内氏の安芸攻略の拠点となる。大内氏は毛利氏をはじめとする安芸国人層と強く結びつき，その勢力の拡大阻止を目論む室町幕府やその尖兵と化せられた分郡主安芸武田氏と抗争を繰り返した。そして，16世紀に入るとこれに安芸国攻略を図る出雲尼子氏との抗争が加わる。大内氏は安芸国侵攻にあたり，武田氏が制海権を握る広島湾頭を避けて，阿曾沼氏・野間氏・呉衆・竹原小早川氏など大内氏に与力する勢力が制海権をもつ広島湾東岸～呉浦・広浦～三津湾といった瀬戸内沿岸部から内陸の東西条へ入る複数の連絡道を維持したと考えられている。そのなかでも，広浦から黒瀬川沿いに北上して東西条に

1　下郷遺跡
2　森重古墓
3　森近土居屋敷跡
4　大河内古墓群
5　宗近柳国第１・２号古墳
6　岩幕山山麓遺跡
7　宗近柳国第３号古墳
8　八ッ溝遺跡
9　土肥氏館跡
10　道免遺跡
11　梶屋迫館跡
12　塚ヶ畦遺跡
13　保田古墳群
14　ナメラ山古墓
15　二ッ山城跡

第２図　下郷遺跡周辺遺跡分布図（１：25,000）

辿り着くルートが特に重要な経路であったことは，陶晴賢が黒瀬衆を蜂起させて毛利氏に対する最後の抵抗を試みた1554（天文23）年の岩山城・恵比根山城の戦いが如実に物語っている。この東西条の範囲は本来は西条盆地にほぼ限定されていたが，安芸国における大内氏の勢力拡大に伴って後には瀬戸内海沿岸にまで及ぶようになったと考えられる。大内氏は，この東西条の経営の拠点として15世紀半ば頃までには鏡山城を築き，有力家臣を代官（のちに西条守護）として常駐させた。鏡山城は1523（大永３）年，南下した尼子氏のために陥落し，その後大内氏は拠点を西方の杣（そま）城，更には槌山（つちやま）城へと移した。しかし，その槌山城も1551（天文20）年に陶・毛利軍に攻められて陥落し，大内氏は安芸国経営の拠点を失った。そして，当地域にはやがて中国一円の領主となる毛利氏の支配が全面的に及ぶようになる。

中世の遺跡としては，山城跡・館跡・古墓があるが，調査が行われたのは黒瀬町大字小多田のナメラ山古墓[12]のみである。原状を留めない五輪塔で，室町時代のものと報告されている。

山城跡は調査が行なわれたものはないが，主なものとして上記の岩山城跡・恵比根山城跡のほかに二ツ山城跡がある。また，館跡として東広島市の森近土居屋敷跡や黒瀬町の梶屋迫館跡（土肥広親館跡），八ツ溝（やつみぞ）遺跡，土肥氏館跡などがある。岩山城跡は黒瀬川を眼下に望む比高270mの高所に位置し，５つの郭と井戸が残る。森近土居屋敷跡は下郷遺跡の北２kmの水田地帯にある。周囲に土塁と堀を廻らす一辺40mの方形の屋敷跡で，上三永の荒谷土居屋敷跡とともに16世紀に竹原小早川氏の家臣であった荒谷氏の屋敷跡である。黒瀬町乃美尾の八ツ溝遺跡は黒瀬川西岸の水田地帯に存在し，土塁の痕跡と古墓が残ることから館跡と考えられている。

註

(1) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「西ガガラ遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 Ⅵ・ⅩⅡ・ⅩⅢ 1988・1995・1997年

(2) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鴻の巣遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 Ⅶ・Ⅷ 1989・1990年

(3) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「山中池南遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 Ⅹ 1992年

広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「山中池南遺跡第２地点の調査」「山中池南遺跡第６地点の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 ⅩⅣ 1998年

広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室「山中池南遺跡第２地点の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 ⅩⅤ・ⅩⅥ 1999・2001年

(4) 財団法人広島県教育事業団「日向一里塚」『近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡』 2003年

(5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田平遺跡発掘調査報告書』 2001年

(6) 広島県教育委員会『西本遺跡群―Ａ・Ｂ・Ｃ地点―』 1976年

東広島市教育委員会『西本遺跡群―Ｄ・Ｅ・Ｆ地点―』 1976年

淡神文化財協会『西本６号遺跡発掘調査報告書』 1995年

財団法人東広島市教育文化振興事業団『西本６号遺跡発掘調査報告書』１ 1996年

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西本６号遺跡』 1997年

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西本３・４号遺跡』 1999年

財団法人東広島市教育文化振興事業団『西本２，３・４，７号遺跡発掘調査報告書』 1999年

(7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ～Ⅴ　1990・1992～1994年
近畿大学『東広島ニュータウン遺跡群　新住西１・４地点遺跡調査報告書』 1992年
(8) 財団法人東広島市教育文化振興事業団『西東子遺跡発掘調査報告書』 1996年
(9) 広島県教育委員会「岩幕山山麓遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』 1973年
(10) 広島県教育委員会「宗近柳国古墳」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』 1973年
(11) 黒瀬町教育委員会『調査概報　岩幕山古墳』 1993年
(12) 黒瀬町教育委員会『ナメラ山古墓発掘調査報告書』 1992年

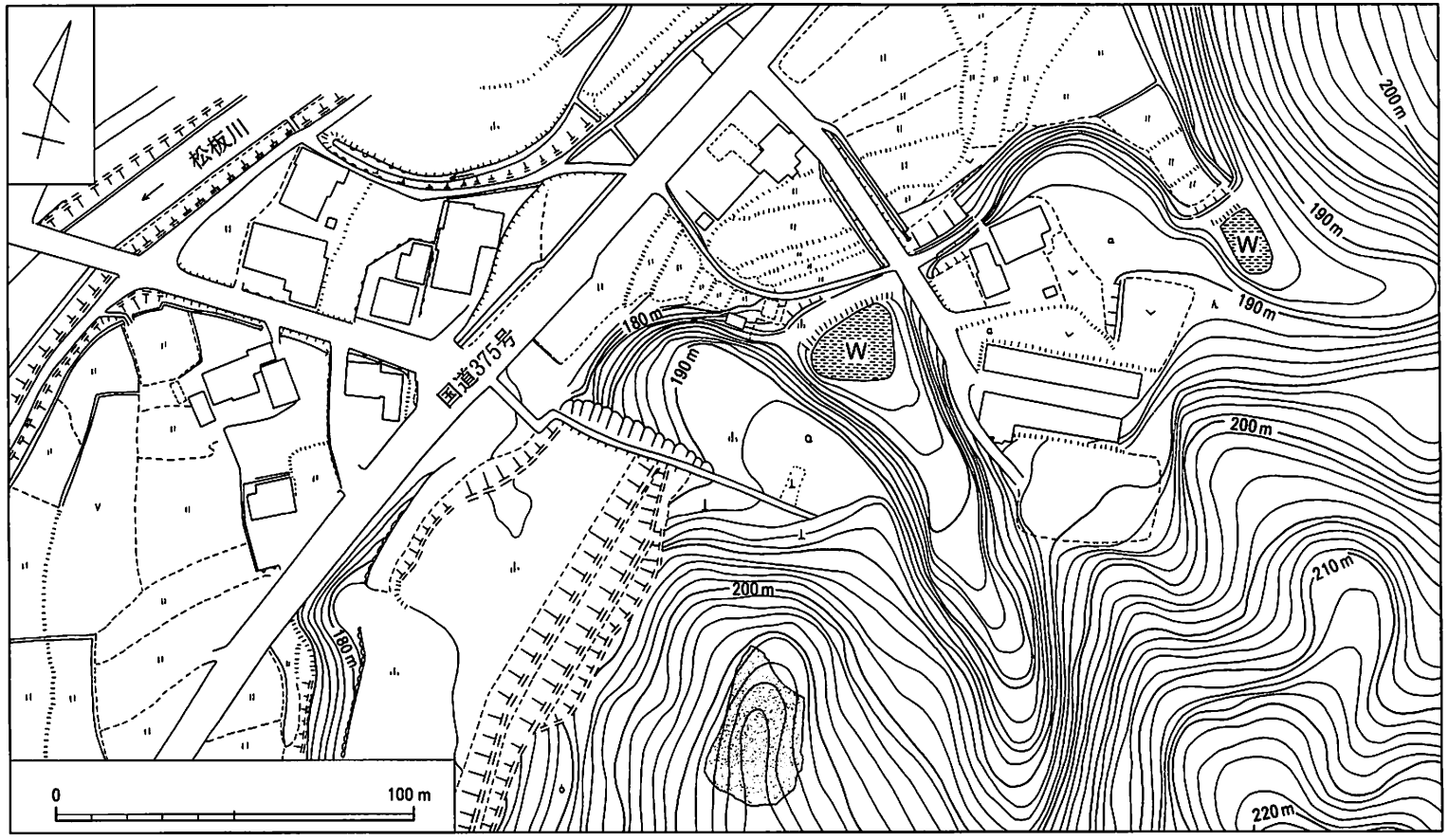
参考文献

・広島県『広島県史』中世　通史Ⅱ　1984年
・広島県『広島県史』古代・中世資料編Ⅳ　1978年
・後藤陽一監修『広島県の地名』 平凡社　1982年
・土井作治監修『図説東広島・竹原・呉』 郷土出版社　2001年
・中国新聞社編『広島県大百科事典』上巻　1982年

Ⅲ　調査の概要

下郷遺跡は東広島市中央南端の賀茂郡黒瀬町との境付近に位置する弥生時代後期の集落跡である。西条盆地の南縁には標高300～400m級の低丘陵が東西に連なり，その中央を北から流れ下ってきた黒瀬川が断ち切って黒瀬盆地に流入する。下郷遺跡は黒瀬川が北東方向から南流してきた支流松板川を併せて大きく蛇行する個所の東岸に位置し，標高363mの山塊から西に派生した尾根から北に短く延びる丘陵端部に立地する（標高210m）。黒瀬川沿いの平野部からの比高約25mである。遺跡前方の龍王山（標高356m）が西条盆地中心部への視界を遮り，遺跡南西方向に広がる黒瀬盆地への眺望が開けることから，本遺跡は西条盆地の南端というよりも，むしろ東西8km，南北3kmと東西に長い黒瀬盆地の北東側の入口に位置するといえる。南北に細長い丘陵の頂部から南あるいは南東方向に緩やかに下る緩斜面にかけて遺構が広がる。南側調査区外に緩やかな尾根が続くことから，さらに南側に遺跡が広がる可能性が強い。調査区の現況は山林で，調査面積は1,000m²である。地表から遺構面までの深さは30～70cmで，調査区の北側2／3は花崗岩バイラン土の砂質土壌が主体でかなり水捌けが良いが，緩斜面の南側1／3は軟質の明黄褐色～黄褐色粘質土の地山で水捌けは良くない。調査は，遺構面間近まで重機（0.25m³のミニバックホー）により表土を除去してから行なった。

検出した遺構の内訳は，竪穴住居跡3軒（ＳＢ１～３），性格不明の遺構5基（ＳＸ１～５）である。出土遺物の総量は中型コンテナ3箱・大型コンテナ2箱で，報告遺物40点の内訳は，弥生土器29点（壺・甕・鉢・高杯・底部片），石製品8点（スクレイパー・砥石・台石），鉄製品1点（鉄鏃），古銭2点（寛永通寶）である。



第３図　周辺地形図（１：2,000）（アミ目は調査区を示す。）

Ⅳ　遺構と遺物

南北に長い調査区の中央から南半にかけて，竪穴住居跡３軒と性格不明の遺構５基を検出した。竪穴住居跡は尾根頂部から南東及び南緩斜面にかけて，性格不明の遺構は南緩斜面に立地し，後者のうちの３基は南側調査区外に延びており，その全容を明らかにすることはできなかった。

１．竪穴住居跡　調査区中央の尾根頂部に立地する最も規模の大きいＳＢ１，南東及び南緩斜面に立地するやや小型のＳＢ２・ＳＢ３がある。

(1)　ＳＢ１（第５・６図，図版４）

立地　調査区中央に位置し，尾根線上の最高所に立地する（床面の標高210.3ｍ）。南東方向3.4ｍにＳＢ２，南９ｍにＳＢ３，南西7.9ｍにＳＸ１が存在する。住居跡は尾根頂部最高地点から北にやや下傾する個所に造られている。住居の主軸は，ＳＢ１ａがＰ７・Ｐ１の中間とＰ４の中心を結んだ線としてN94°Ｅ，ＳＢ１ｂがＰ８・Ｐ10の中心間を結んだ線としてN88°Ｅとなり，いずれもほぼ東西方向を指す。

規模　住居２軒が重複し，ＳＢ１ａ（古）→ＳＢ１ｂ（新）と拡張している。平面形はいずれも南北に長い楕円形で，規模はＳＢ１ａがほぼ長径6.8ｍ，短径5.5ｍ（床面積25.06㎡），ＳＢ１ｂが長径7.08ｍ，短径6.3ｍ（床面積30.86㎡）である。南北に30㎝，東西に80㎝程度（床面積5.8㎡）の拡張を行なっている。南北方向は東壁南半から南壁にかけてと北壁中央において住居壁を共有していることから，住居の拡張は主として東及び西方向になされ，住居の平面形の楕円形から円形への指向が窺われる（住居跡の平面規模における長軸の長さ／短軸の長さの値＝楕円形度でみると，ＳＢ１ａ＝1.24に対してＳＢ１ｂ＝1.12となりより正円形に近い）。

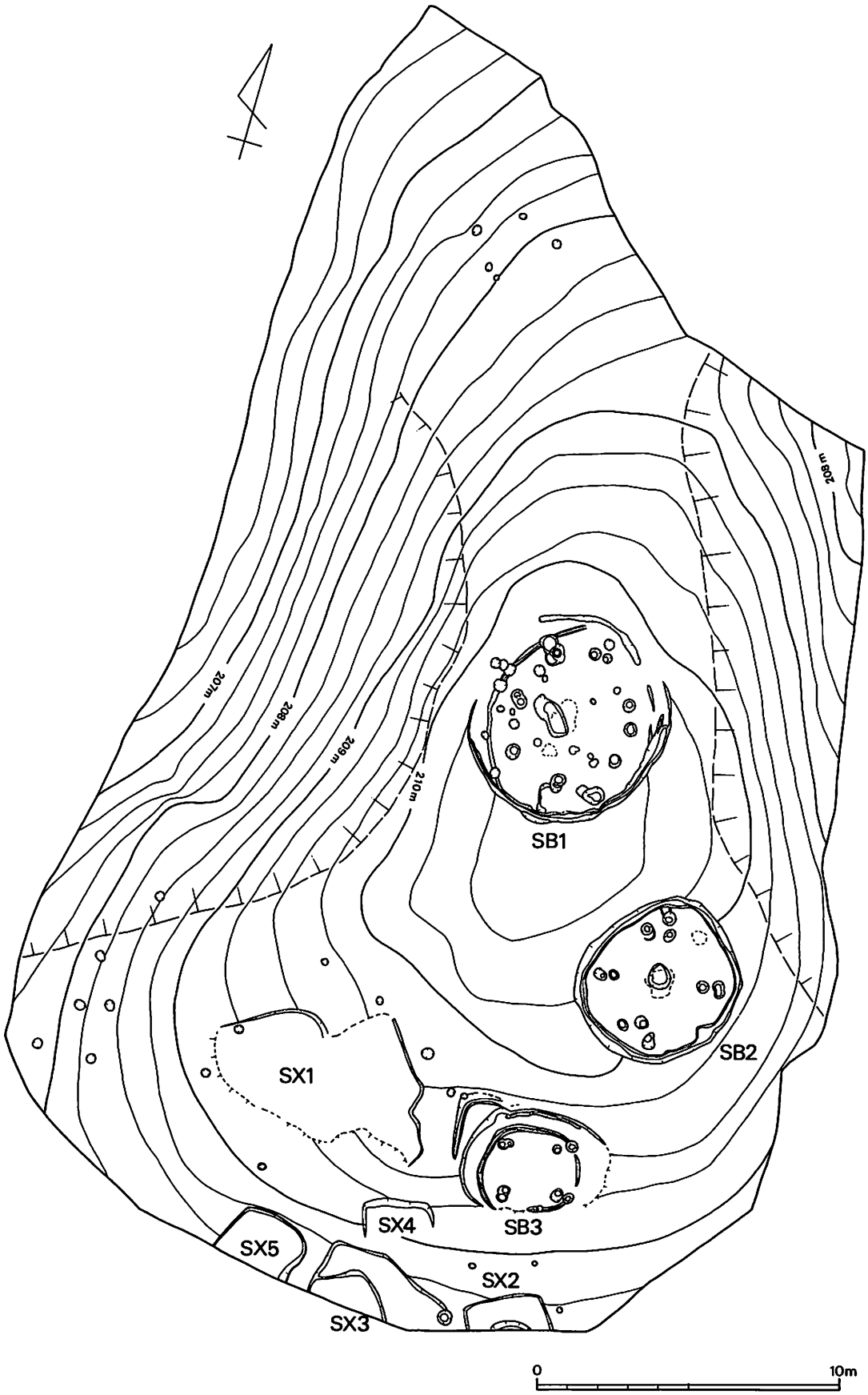
住居壁はＳＢ１ｂの東～南～西壁において認められ，北壁は流出あるいは削平により失っている。壁高は最も残りの良い南東壁（Ｐ13付近）で36㎝である。

床面　南壁中央際（Ｐ２付近）が最も高く，北側中央（Ｐ11付近）が最も低い。南から北に緩やかに下傾する（最大高低差15㎝）ものの，ほぼ平坦である。

壁溝　ＳＢ１ａ・１ｂともにほぼ全周するが，ＳＢ１ａは北側で３か所途切れ，ＳＢ１ｂは北東側で１か所，西側で１か所大きく途切れる。また，東壁南半から南壁にかけては壁溝を共有し，北側中央では両者の壁溝が重複する。なお，ＳＢ１ｂの東壁南半では壁溝の掘方状のものが存在する。

規模は，ＳＢ１ａの壁溝が上端幅５～29㎝（平均10数㎝），深さ（最大）６㎝で，溝底面は僅かに南から北に下傾するがほぼ平坦である。ＳＢ１ｂの壁溝は，上端幅７～16㎝，深さ（最大）９㎝で，溝底面は同じく南から北に僅かに傾斜するが，ほぼ平坦である。

主柱穴　ピットは34基あるが，一定の平面規模と深さをもつ柱穴は計12基で，主柱穴はそのうちＰ１～Ｐ11の11基とみられる。ＳＢ１ａの主柱穴はＰ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７



第4図　遺構配置図（1：200）

の７基で，これらを南北に長軸をもつ多角形に配置している。多少の歪みが見られるが，柱穴間の距離は1.64～2.06m（平均1.83m）と比較的一定である（Ｐ１－Ｐ２間＝2.06m，Ｐ２－Ｐ３間＝1.8m，Ｐ３－Ｐ４間＝1.9m，Ｐ４－Ｐ５間＝1.86m，Ｐ５－Ｐ６間＝1.64m，Ｐ６－Ｐ７間＝1.66m，Ｐ７－Ｐ１間＝1.9m）。北側のＰ５－Ｐ６間・Ｐ６－Ｐ７間の２柱間が1.64m・1.66mとやや短く，ほかの５柱間は1.8～2.06mとほぼ一定で長い。つまり，北側の２柱間が他の柱間に較べて短く配置されている。各主柱穴の規模は，Ｐ１が長径42cm×短径38cm，深さ48cm，Ｐ２はＳＢ１ｂのＰ９と重なっており，長径60cm×短径38cm，深さ65cm，Ｐ３は径46cm，深さ65cm，Ｐ４はＳＢ１ｂのＰ10と重なっており，長径64cm×短径38cm，深さ36cm，Ｐ５は長径58cm×短径42cm，深さ62cm，Ｐ６は長径31cm×短径29cm，深さ57cm，Ｐ７は長径42cm×短径38cm，深さ65cmである。径はＰ６がやや小さめ，Ｐ５がやや大型だが，長径31～64cm（平均49cm），短径29～46cm（平均38cm）とほぼ40cm前後，深さはＰ４やＰ１が浅めだが，ほかは57～65cmと深い（36～65cm，平均57cm）。Ｐ３・Ｐ５には柱痕跡が残る。前者が径18cm，後者が径24cmで，径20cm程度の比較的太い柱材の使用が窺われる。

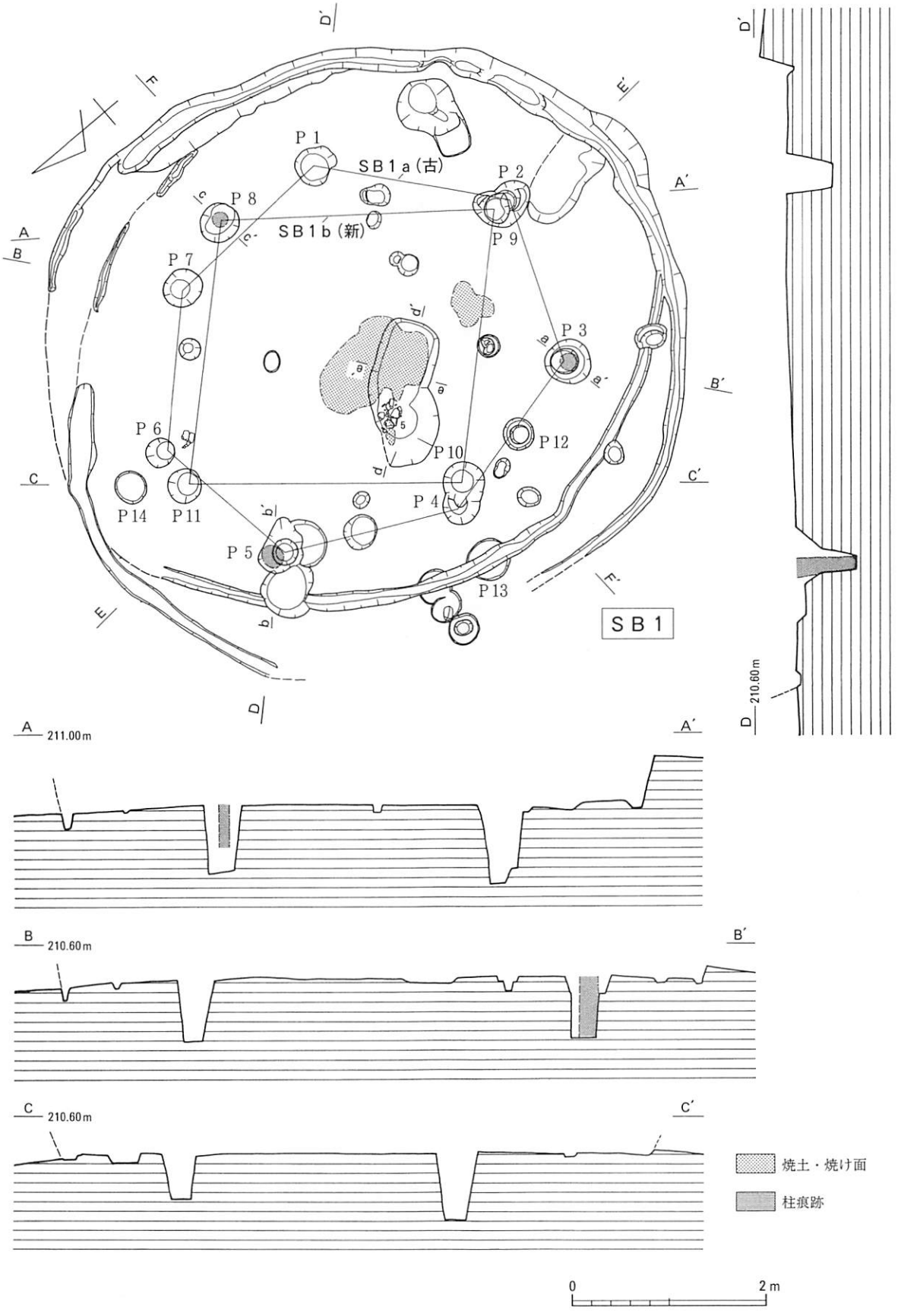
ＳＢ１ｂはＰ８－Ｐ９－Ｐ10－Ｐ11の４本柱だが，その配置は方形ではなく大きく菱形である。柱間距離は2.78～2.86m（平均2.83m）とほぼ一定である（Ｐ８－Ｐ９間＝2.84m，Ｐ９－Ｐ10間＝2.86m，Ｐ10－Ｐ11間＝2.84m，Ｐ11－Ｐ８間＝2.78m）。先行するＳＢ１ａに較べると，約1.5倍広い。各主柱穴の規模は，Ｐ８が長径42cm×短径39cm，深さ71cm，Ｐ９・Ｐ10はいずれもＳＢ１ａの主柱穴と一部重複しており，それぞれＰ９が短径45cm，深さ84cm，Ｐ10が短径42cm，深さ72cmで，Ｐ11は径36cm，深さ47cmである。径は36～45cm（平均41cm）と均一だが，深さはＰ11が47cmと浅いものの，他は71～84cmと深い（平均69cm）。ＳＢ１ａと比較すると，径はほぼ同じだが，深さは10cmほど深い。なお，Ｐ８では径15cmの柱痕跡を検出した。

炉跡　床面ほぼ中央に炉跡が存在する。ほぼ北西－南東方向に長い隅丸長方形の平面形で，規模は長さ154cm，幅60cm，深さ３～９cmである。底面は南が浅く，北に向かって緩やかに下傾する。南半部を中心に底面直上に厚さ２cmの焼土，更にその上に厚さ４cmほどの炭が堆積していた。炉跡の東から南にかけては比較的厚い焼土の広がりがみられた。炉跡東側の焼土は厚さが最大20cmあり，炉跡内から掻き出されたものと考えられる。一方，南側の焼土は厚さ10cmだが，床面との間に薄く間層（淡黄色粘質土層）がみられることから，本住居に伴わない可能性が高い。

出土遺物　弥生土器16点，鉄器１点，石製品３点の計20点と出土点数はそれほど多くなく，弥生土器の多くは小破片である。大半は覆土からの出土で，柱穴内（Ｐ13＝９・14，Ｐ14＝13）や床面直上（６・18・20）で出土した遺物は少ない。５は炉跡内北半でまとまって出土した。

①弥生土器（第７図１～16，図版10）　壺・甕・鉢・高杯・底部片がある。

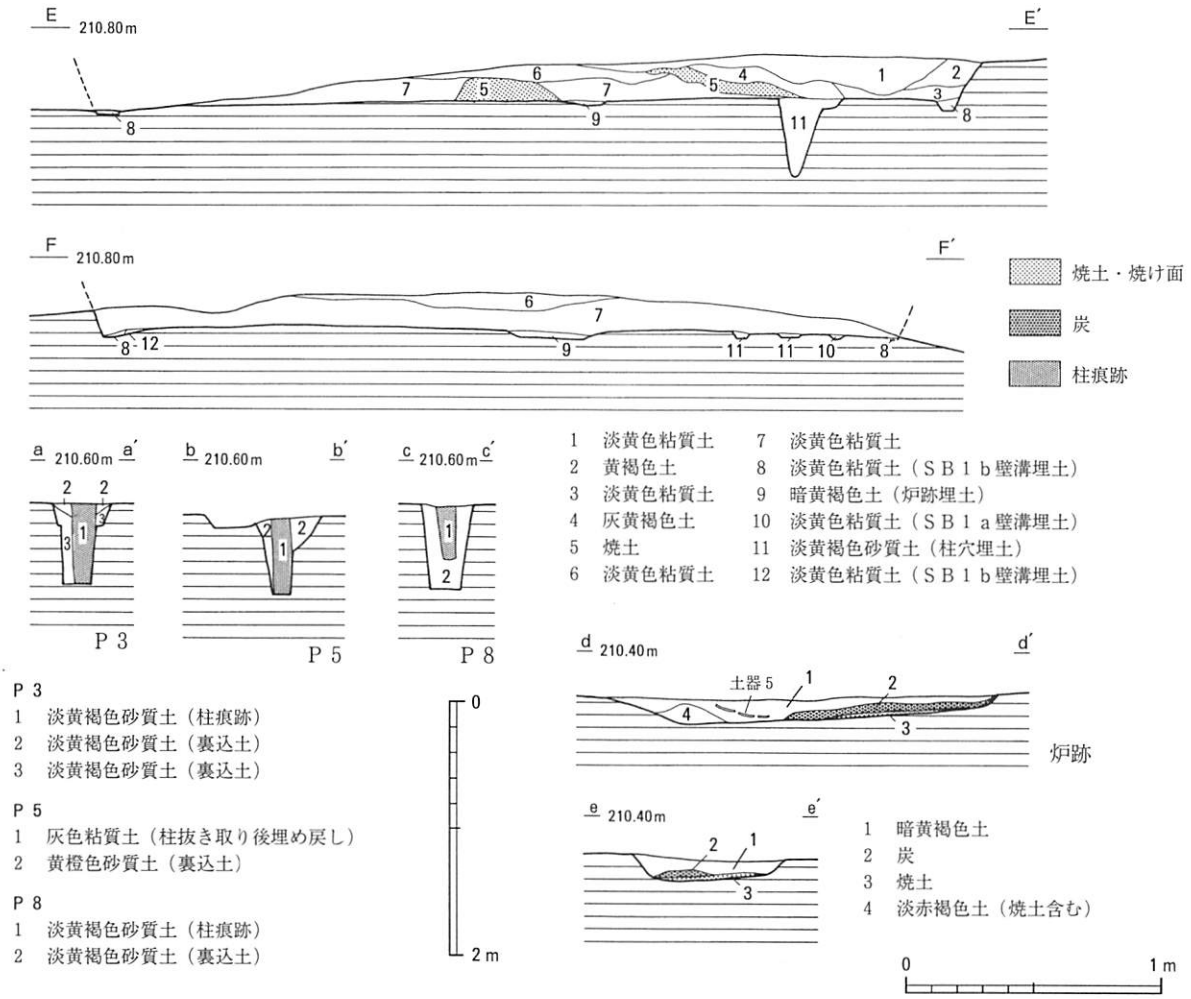
１は二重口縁壺の口縁部で，外上方に湾曲しながら延びた擬口縁端部から内上方にやや外湾気味に延びる口縁端部を平坦に納める。器壁は比較的部厚く，色調は黄褐色である。調整は，外面横ナデ，内面は口縁部が横ナデあるいは横方向の板ナデ，擬口縁部が横ナデ，頸部は横方向のヘラケズリである。復元口径12.2cmである。２～４は甕で，２・３は口縁部片である。２は外上方



第5図　ＳＢ１実測図(1)（１：60）

にやや湾曲気味に延びた端部を下方に拡張し，端面に１～２条の凹線を施す。調整は，内面が丁寧なナデあるいはミガキ，外面は縦方向の密なハケ目である。３は開き気味に直立した締まりの良くない頸部から短く外上方に延びた窄まり気味の口縁部の端部を平坦に納めている。調整は，口縁部内外面が横ナデ，体部内面が横方向のヘラケズリ，頸部外面は密な縦方向の浅いハケ目あるいは板ナデである。４の体部は内湾気味に直立し，頸部でくの字に屈曲して水平に近く外方に延びた口縁部の端部を平坦に納める。調整は，内面が口縁端面から口縁部にかけて横ナデ，体部上端ナデつけ，体部は縦方向のヘラケズリ，外面は体部が縦方向のヘラミガキを施す。頸部から口縁部にかけては調整不明である。復元口径16.4cmである。

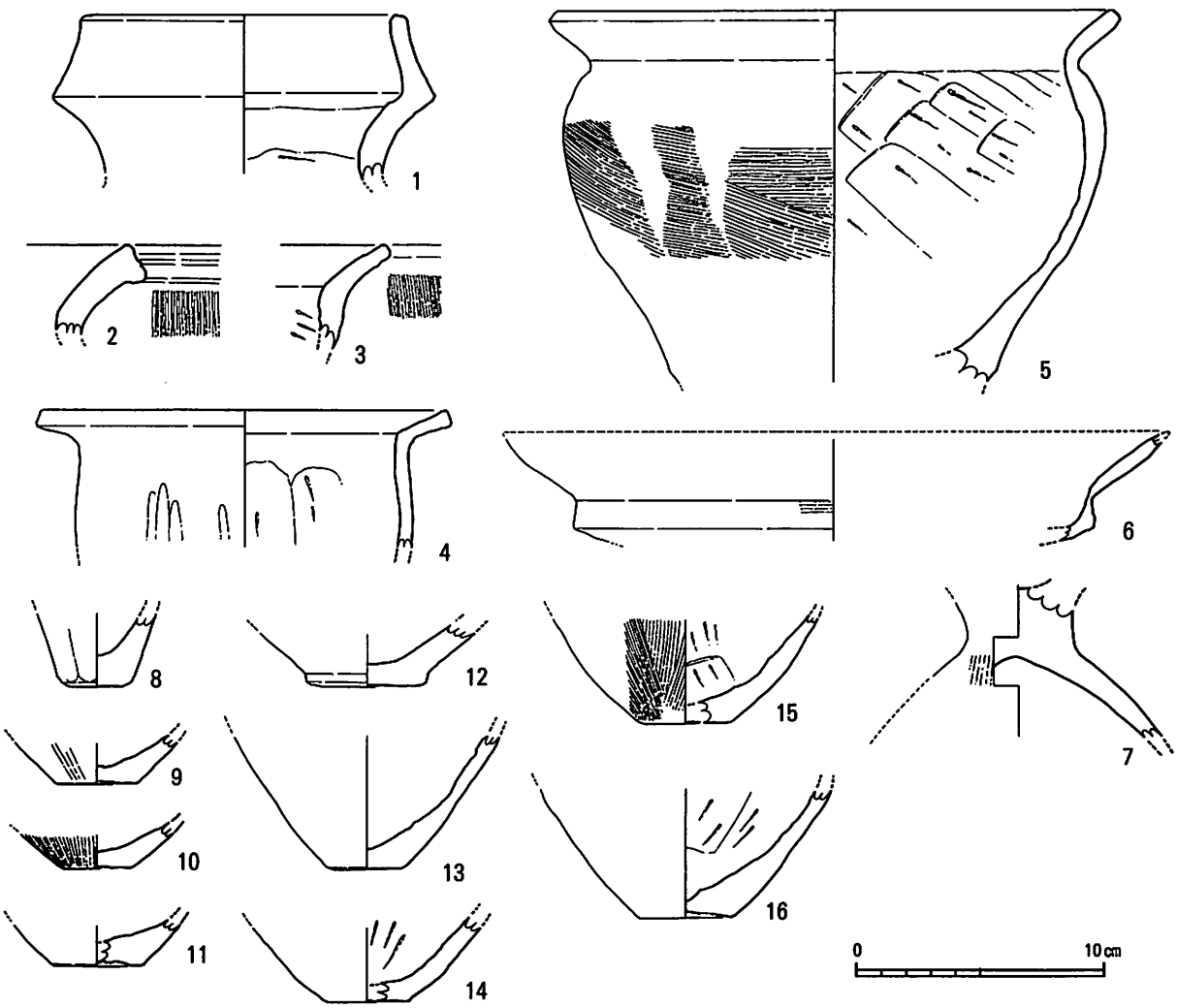
５は復元口径22.5cm，復元体部最大径21.8cmの鉢である。最大径部が上方にあるやや肩の張る器形で，丸みの強い体部から窄まった頸部でくの字にやや強く屈曲し，外上方に直線的に延びた短い口縁部の端部を平坦に納める。底部は失っており形状は分からないが，窄まって部厚い底部になる可能性がある。調整は，口縁部内外面はやや雑な横ナデ，体部内面は斜め方向のヘラケズリ，外面肩部横方向の板ナデ，体部中位は斜めあるいは横方向の細かいハケ目を施す。体部下半



第６図　ＳＢ１実測図(2)（１：30，１：60）

は不明確だが，未調整の可能性がある。6は推定口径26～27cmの高杯の杯部である。水平に延びた杯底部から短く直立して段を形成したあと外上方に直線的に延びて口縁端部に繋がると思われる。調整は，段の外面にごく部分的に横方向の幅広のハケ目が見られるほかは，器壁の損耗により調整は不明である。7は高杯の脚柱部から脚裾部にかけての破片とみられる。調整は，外面が縦方向の幅広のハケ目，内面は調整不明である。部分的に杯部の内底面が残存する。

8～16は底部片である。8は復元底径2.8cmの比較的部厚い底部だが，小型の器形である。色調は，器表面が淡灰～灰褐色，胎土が灰黒～黒褐色で，内面及び外底面ナデ，体部外面縦方向の板ナデとみられる。12は復元底径4.8cmで，やや突出気味の平底である。調整は不明である。このほかの9～11・13～16は底径3.2～4cmの平底で，やや内湾気味に立ち上がる体部をもつ。調整は，9の外面が縦方向のミガキ，10の外面が縦方向の幅広のハケ目，11・13は全体に調整不明，14の内面が縦方向のヘラケズリ，15は内面が縦方向のヘラケズリ，外面・外底面は縦方向のハケ目，16の内面が縦方向のヘラケズリで，そのほかは調整不明である。内面ヘラケズリ，外面縦方

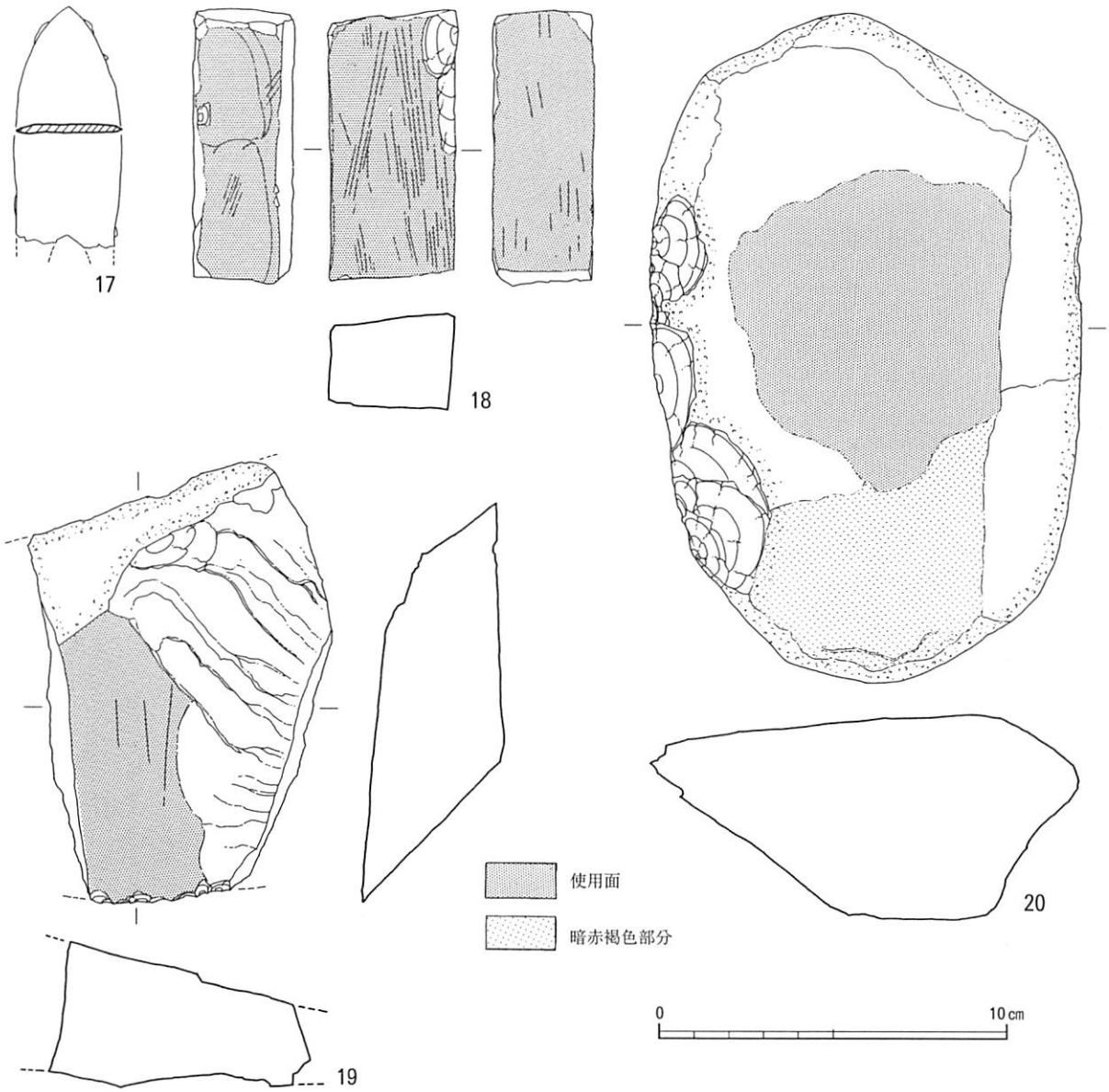


第7図　ＳＢ１出土土器実測図（１：３）

向のハケ目が主体である。

② 鉄器（第８図17，図版10） 17は凹基腸抉式の基部をもつ無茎三角形式の鉄鏃とみられる。基部の端部が欠けており，その形状や抉り込みの状況などについては不明である。現存規模は，長さ6.9cm，幅3.1cm，厚さ2.5mm，重さ12.02ｇである。

③ 石製品（第８図18～20，図版10） 砥石３点が出土した。いずれも住居南西側の焼土の広がりの周辺で出土している（18・20は床面近く，19は上層）。18は長さ7.8cm，幅3.75cm，厚さ2.9cm，重さ161.26ｇの長方体の形状をなす砥石で，表面を最も良く使っているが，両側面を含めた３面を使用している。使用面は平滑で，縦方向の擦痕がみられる。石材は溶結凝灰岩である。19は両側面が切断されて失っており，長さ12.6cm，幅8.65cm，厚さ4.2cm，重さ456ｇの現存規模である。



第８図　ＳＢ１出土鉄器・石製品実測図（１：２）

上面に自然面を残し，表面の一角に縦方向の擦痕をもつ平滑な使用面がみられる。石材は凝灰岩である。20は長さ18.8cm，幅12.35cm，厚さ6.15cm，重さ1,942ｇの丸みの強い自然礫を用いている。表面側の平坦面の中央に平滑な使用面がみられる。擦痕は認められない。使用面の下方は暗赤褐色を帯びており，熱を受けたものと思われる。石材は珪長岩である。

(2)　ＳＢ２（第９図，図版５・９ａ～９ｃ）

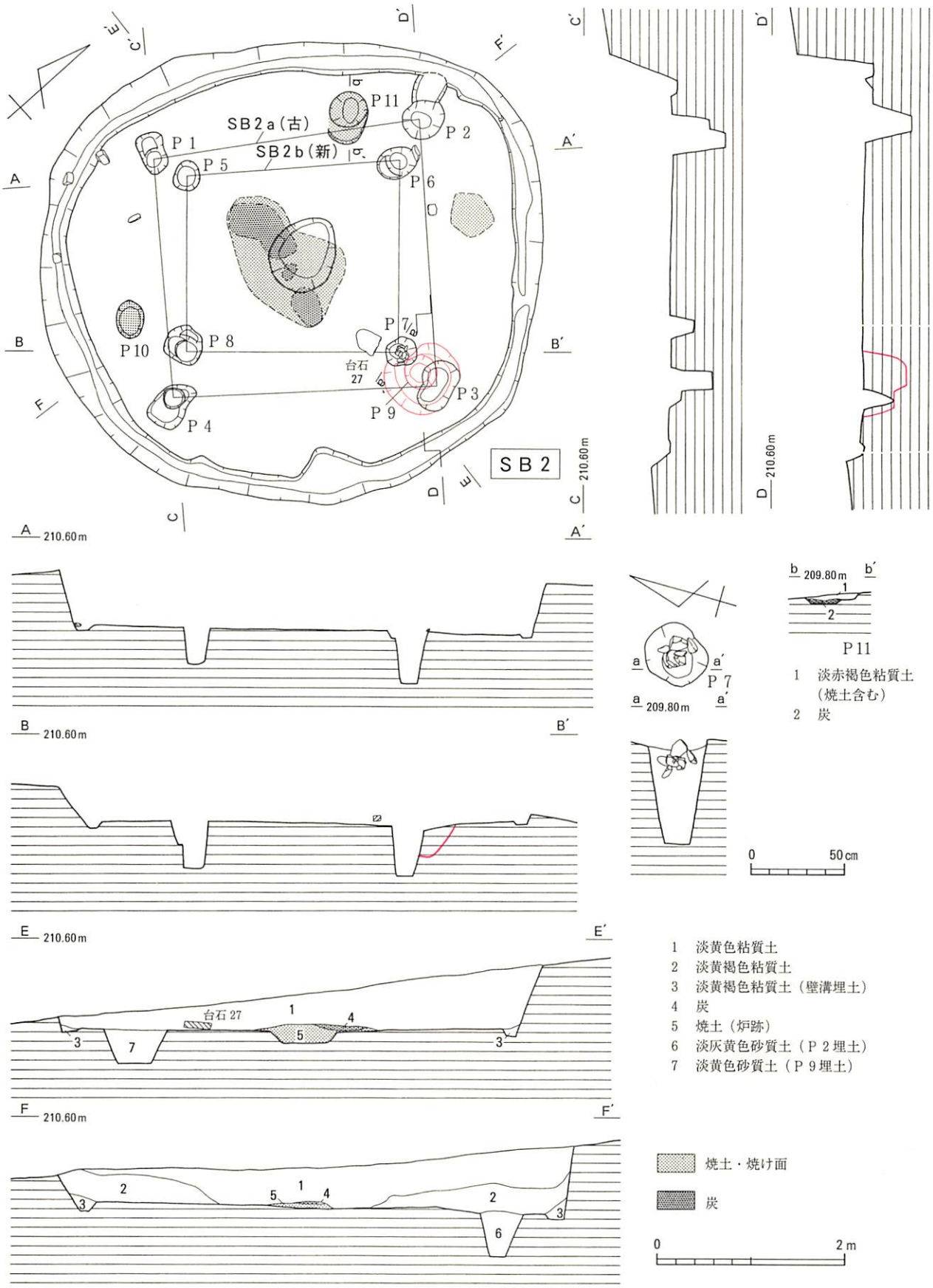
立地　調査区南東部の尾根頂部からやや南東側緩斜面に下った所に立地する（床面の標高209.6ｍ）。ＳＢ１の南東3.4mに位置し，南西2.6mにはＳＢ３が存在する。住居の主軸は，ＳＢ２ａがＰ１とＰ２，Ｐ４とＰ３を結んだ線の各中点を結んだ線とすればE52°Wとなり，ＳＢ２ｂはＰ５とＰ６，Ｐ８とＰ７を結んだ線の各中点を結んだ線とすればN47°Wとなり，いずれもほぼ北西－南東方向を指す。

規模　主柱穴の組み合わせが２組あることから，２軒の住居の重複がみられるが，床や住居壁・壁溝は共用したものとみられる。住居の平面形は北東－南西方向がいくらか長い丸みの強い隅丸方形で，規模は北西－南東方向4.94m，北東－南西方向5.38m（床面積16.72m²）である。住居壁は唯一全周するが，斜面高所側の北西側がよく残存し（71～77cm），斜面低所側の南東側の残りはよくない（６～17cm）。壁高は，最も残りの良い南西隅（Ｐ１付近）で77cm，最も残りの良くない北東隅（Ｐ３付近）で６cmである。

床面　南壁際（Ｐ１～Ｐ４付近）が高く，北西隅（Ｐ２付近）が低い（最大高低差12cm）。南から北に緩やかに下傾するが，ほぼ平坦である。

壁溝　途切れることなく全周し，その規模は上端幅10～54cm（平均10数cm），深さ（最大）８cm（西壁際中央）である。溝底面はほぼ平坦だが，北東隅が高く，西壁際北半が低い（最大高低差14cm）。

主柱穴　床面中央の炉穴以外に11基のピットが存在するが，柱穴はＰ１～Ｐ９の計９基である。４本柱構造の住居が２軒重複し，主柱穴の組み合わせは，Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３（Ｐ９）－Ｐ４（ＳＢ２ａ）とＰ５－Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８（ＳＢ２ｂ）となる。住居内外側の前者が古く，内側の後者が新しい。即ち，ＳＢ２ａ（古）→ＳＢ２ｂ（新）と住居の建替えに際して，住居壁や床面を共有しながら主柱を住居の内側へ40～50cm移動させている。このことは，(1)Ｐ１～Ｐ４の柱穴が住居の中心に向かって放射状に長軸をもつ楕円形の平面形をなす二段掘りで，しかも住居の中心側が深く，外側が浅いことから，いずれも柱の抜き取りが考えられること。(2)Ｐ２の外側の浅い部分が壁溝に壊されていることから，主柱の移動，つまり住居の建替え時に若干の壁溝の拡幅が行なわれ，それに伴って先行する住居の主柱穴の一部が壊されたと考えられること。(3)Ｐ１～Ｐ４の柱穴の埋土は淡灰黄色砂質土でいずれも人為的に埋め戻されたとみられること。(4)Ｐ３とＰ９は一体のものである可能性があるが，このＰ９がＰ７に壊されていること。以上の様々な証左から，何らかの理由によって，外側のＳＢ２ａから内側のＳＢ２ｂへと主柱の移動による建替えがなされたものと思われる。



第9図　SB2実測図（1：30，1：60）

主柱穴間の距離は，ＳＢ２ａは北東－南西方向のＰ１－Ｐ２間・Ｐ４－Ｐ３間が2.86m，北西－南東方向のＰ１－Ｐ４間が2.54m，Ｐ２－Ｐ３間が2.74mと北東－南西方向の柱間距離が北西－南東方向のそれに較べて12～32cm長い（平均2.75m）。つまり，ＳＢ２ａの主柱の配置状況は北東－南西方向の柱間距離が北西－南東方向のそれより幾らか長い方形をなす。ＳＢ２ｂの主柱穴間の距離は，北東－南西方向のＰ５－Ｐ６間・Ｐ８－Ｐ７間が2.26m，北西－南東方向のＰ５－Ｐ８間が1.88m，Ｐ６－Ｐ７間が2.04mと北東－南西方向の柱間距離が北西－南東方向のそれに較べて22～38cm長い（平均2.11m）。ＳＢ２ｂの主柱の配置状況はやはり北東－南西方向の柱間距離が北西－南東方向のそれより幾らか長い方形である。２軒ともに北東－南西方向の柱間距離は西辺・東辺が同一であるのに対して，北西－南東方向の柱間距離はいずれも南辺が短く北辺が長い（16～20cm）。ＳＢ２ａ（古）とＳＢ２ｂ（新）の比較では，北東－南西方向の柱間距離は60cm，北西－南東方向の柱間距離は南辺が66cm，北辺が70cmと60～70cm短くなっており，新旧の柱穴はＰ１→Ｐ５＝40cm，Ｐ２→Ｐ６＝50cm，Ｐ３→Ｐ７＝50cm，Ｐ４→Ｐ８＝50cmと40～50cm内側に移動させている。

各主柱穴の規模は，ＳＢ２ａのＰ１が長径45cm×短径30cm，深さ58cm，Ｐ２が長径74cm×短径44cm，深さ49cm，Ｐ３が長径55cm×短径38cm，深さ36cm，Ｐ４が長径54cm×短径36cm，深さ46cm，Ｐ９が長径77cm×短径70cm，深さ48cm，ＳＢ２ｂのＰ５が長径32cm×短径28cm，深さ43cm，Ｐ６が長径42cm×短径34cm，深さ53cm，Ｐ７が長径38cm×短径34cm，深さ46cm，Ｐ８が長径40cm×短径39cm，深さ51cmである。ＳＢ２ａの主柱穴は長径45～77cm（平均61cm），短径30～70cm（平均44cm），深さ36～58cm（平均47cm），ＳＢ２ｂの主柱穴は長径32～42cm（平均38cm），短径28～39cm（平均34cm），深さ43～53cm（平均48cm）である。ＳＢ２ａの主柱穴はいずれも二段掘りのため長径が長く，また，規模の大きいＰ９を含めているので柱穴規模の平均値が大きいが，これらを除けば，ＳＢ２ａ・２ｂともに径30～40cm，深さ40～50cm程度とほぼ同規模となる。

なお，Ｐ７内部には数～10cm大の礫数点が入り込んでいたが，これらが裏込めの石なのかあるいは柱抜き取り穴に入れ込まれたものなのかは明確でない。

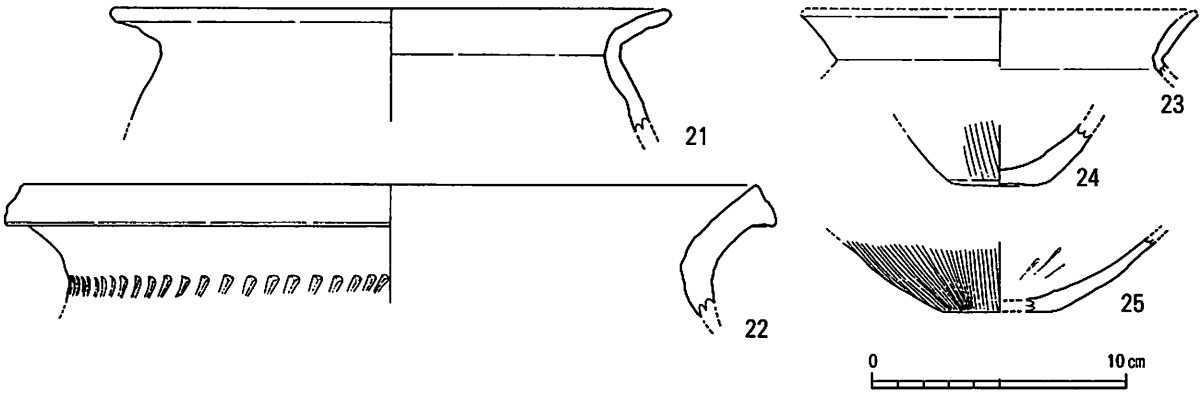
炉跡　床面ほぼ中央に平面形不整楕円形，長径84cm×短径68cm，深さ14cmの炉跡があり，その内部には焼土が充満していた。この炉跡の周囲の東西1.6m×南北１mの範囲に焼土の広がりが見られ，焼土の上には部分的に炭の堆積がみられた。

この他，炉跡北側1.24mの床面（50cm×40cmの範囲）が焼けていた。また，炉跡の北側と南側に焼土が充満した浅い小ピット２基（Ｐ10・Ｐ11）が存在する。南壁側のＰ８南側に近接するＰ10は長径40cm×短径29cm，深さ11cm，北西隅のＰ２・Ｐ６の西側に近接するＰ11は長径57cm×短径41cm，深さ10cmの規模である。これらの小ピットの機能や用途についてははっきりしない。

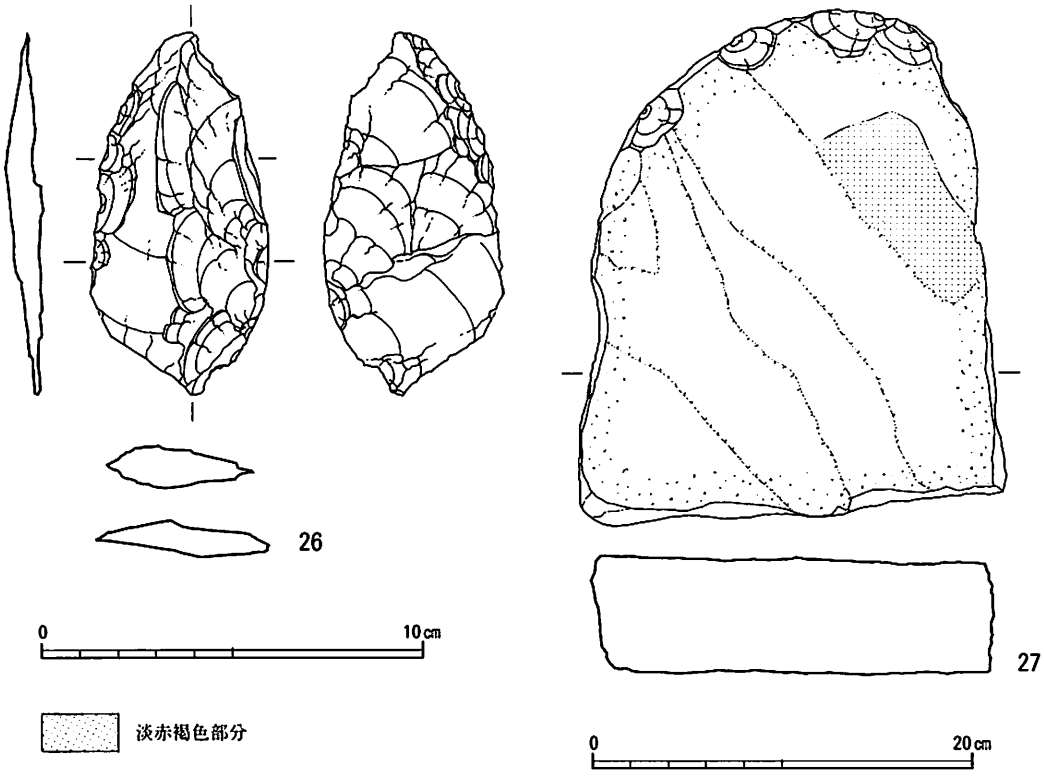
出土遺物（第10・11図，図版10）　出土点数は少ない。図示できたのは，弥生土器５点，石製品２点の７点のみである。弥生土器・甕（21）はＳＢ２ａの南隅のＰ４から，石製品２点はいずれも床面直上から出土した。台石27はＰ７西側に近接して出土した。22～25の弥生土器はいずれも覆土からの出土である。

① 弥生土器（21～25） 甕・底部片がある。

21～23は甕である。21は頸部で比較的強く屈曲して水平に近く外上方に延びた口縁部の端部を丸く納める。調整は，外面口縁部が横ナデでそのほかは調整不明である。復元口径21.4cmである。22は部厚い器壁をもつ復元口径28.6cmの大型甕の口縁部片である。頸部からやや湾曲気味に外上方に延びた口縁部の端部を下方に拡張し，平坦な端面を作り出している。調整は器壁の損耗のため不明確な部分が多いが，口縁端面には凹線文らしき痕跡が見られ，外面頸部には斜位の連続刺突文が施されている。23は口縁端部を欠損しているが，復元推定口径約15.2cmの器壁が比較的薄い甕の口縁部片である。比較的良く締まった頸部から外上方にやや湾曲気味に立ち上がり，端部を丸く納める。頸部の屈曲は明瞭で，調整は内外面ともに横ナデと考えられる。



第10図　ＳＢ２出土土器実測図（１：３）



第11図　ＳＢ２出土石製品実測図（１：２，１：４）

24・25は底部片である。24は比較的部厚い器壁のもので，復元底径４㎝の平底である。調整は，内面がナデ，外面が縦方向の幅広のハケ目を施す。25は復元底径4.4㎝の平底の底部片で，調整は内面が縦方向のヘラケズリ，外面は縦方向の密なハケ目である。

② 石製品（26・27） スクレイパー・台石がある。

26は横長剥片素材のスクレイパーで，長さ9.5㎝，幅4.7㎝，厚さ1.1㎝，重さ40.68ｇである。素材剥片の末端左半に背腹両面から加撃して刃部を作り出している。背面末端側には剥片の素材面を残す。石材は灰色～暗灰色の無斑晶安山岩あるいは珪質凝灰岩とみられる。27は，長さ27.0㎝，幅27.4㎝，厚さ6.4㎝，重さ6,860ｇの台石で，石材は黄白色の黒雲母花崗岩である。部厚い板状を呈し，比較的平滑な表面には左上から右下への溝状のごく浅い凹みが２条みられ，使用面と考えられる。また，右側の溝状の凹みの右側にはごく薄く淡赤褐色を呈する部分がある。

(3) ＳＢ３（第12図，図版６・７・９ｄ・９ｆ）

立地 調査区南半中央の尾根頂部から緩やかに南に下る斜面に立地する（床面の標高209.1ｍ）。ＳＢ２の南西2.6ｍに位置し，西１ｍにＳＸ１，南西1.3ｍにＳＸ４，そして南2.8ｍにはＳＸ２がそれぞれ存在する。３軒の住居跡が重複するが，ＳＢ３ａの主軸はＰ１とＰ２，Ｐ４とＰ３を結んだ線の各中点を結んだ線とすればN15°Ｗ，ＳＢ３ｂの主軸はＰ５とＰ６，Ｐ８とＰ７を結んだ線の各中点を結んだ線とすればN13°Ｗとなり，やや西に傾いた南北方向を指す。

規模 平面形が楕円形の住居跡のうち，規模の小さいＳＢ３ａが最も古く，次いでやはり平面形が楕円形で少し規模が大きくなるＳＢ３ｂが作られる。ＳＢ３ａ（古）→ＳＢ３ｂ（新）は住居の拡張・建替えとして捉えられるが，これらの北西方に存在する最も後出のＳＢ３ｃは住居跡のごく一部が残存するに過ぎない。ＳＢ３ｃの平面形はＳＢ３ａ・３ｂとは異なり隅丸方形である。

ＳＢ３ａはＳＢ３ｂによって住居壁を削平され，壁溝と主柱穴のみが残存する。住居規模は，南北2.94ｍ×東西3.30ｍ（床面積6.25㎡）である。ＳＢ３ｂはこのＳＢ３ａより一回り大きく，南北3.4ｍ×東西4.9ｍ（床面積13.08㎡）の現存規模である。ＳＢ３ｂは，床面積でＳＢ３ａの約２倍の広さになっている。ＳＢ３ｂは住居の東辺から南辺にかけて住居壁・壁溝を失っているが，北辺から西辺にかけては比較的良く住居壁が残っている。壁高は最も残りの良い西壁中央で42㎝，北辺は12～27㎝である。

ＳＢ３ｃは住居跡の北西隅をごく部分的に残すのみで，現存規模は北辺1.4ｍ，西辺2.06ｍである。壁高は最も残りの良い北西隅で20㎝である。

床面 ＳＢ３ｂ・３ｃともに床面はほぼ平坦である。

壁溝 ３軒の住居跡はいずれも壁溝が残存している。ＳＢ３ａの壁溝（埋土は淡黄白色粘質土）は東辺と南半に計３か所の途切れがみられるが，ほぼ全周する。その規模は，上端幅３～27㎝（平均10数㎝），深さ（最大）10㎝（南辺東半Ｐ９付近）である（平均３～４㎝）。溝底面は西辺南半が高く，北辺から東辺にかけて下傾する（最大高低差10㎝）が，ほぼ平坦である。ＳＢ３ｂの壁溝（埋土は淡黄色粘質土）は，西辺と北辺を中心に残存し，東辺から南辺にかけては失って

いる。西辺は残りが悪く状況が良く分からないが，上端幅10cm程度，深さ２～４cmである。ＳＢ３ｃは上端幅10数cm，深さ２～４cmの壁溝が残る。

主柱穴　ＳＢ３ａ・３ｂは４本柱で，ＳＢ３ｃの柱構造は不明である。ＳＢ３ａ・３ｂの床面には計９基のピットが存在するが，主柱穴はＰ１～Ｐ８の８基である。これらは２基ずつほぼ同じ位置に存在し，北西隅のＰ１・Ｐ５，南西隅のＰ４・Ｐ８は部分的に重複している。北東隅のＰ２とＰ６が50cmと最も離れている。Ｐ６・Ｐ７はＳＢ３ａの壁溝と重複し，また西半のＰ１・Ｐ５，Ｐ４・Ｐ８の重複する主柱穴の新旧関係はいずれもＰ５・Ｐ８が新しいことから，ＳＢ３ａ（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４）が古く，ＳＢ３ｂ（Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）が新しいと考えられる。

主柱穴間の距離は，ＳＢ３ａのＰ１－Ｐ２間が1.56m，Ｐ４－Ｐ３間が1.72m，Ｐ１－Ｐ４間が1.60m，Ｐ２－Ｐ３間が1.48mと1.48～1.72m（平均1.59m）である。主柱の配置状況はやや歪な方形だが，四辺の柱間距離はほぼ一定である。ＳＢ３ｂの主柱穴間の距離は，Ｐ５－Ｐ６間が2.22m，Ｐ８－Ｐ７間が2.14m，Ｐ５－Ｐ８間が1.80m，Ｐ６－Ｐ７間が1.74mと1.74～2.22m（平均1.98m）である。Ｐ５－Ｐ６間・Ｐ８－Ｐ７間の東西方向の柱間距離が2.14～2.22m，南北方向のＰ５－Ｐ８間・Ｐ６－Ｐ７間が1.74～1.80mで，東西方向の柱穴距離の方が南北方向のそれに較べて34～48cm程長い。ＳＢ３ｂの主柱穴の配置状況は，東西方向がやや長い長方形である。ＳＢ３ａ（古）→ＳＢ３ｂ（新）の建替えに際して，柱間距離が東西方向で42～66cm，南北方向で20～26cm広がっており，柱穴はＰ１→Ｐ５＝20cm，Ｐ２→Ｐ６＝50cm，Ｐ３→Ｐ７＝36cm，Ｐ４→Ｐ８＝26cmと心々で20～50cm外側に移動させている。また，床面は壁溝内縁で48～96cm以上外側に拡張している。

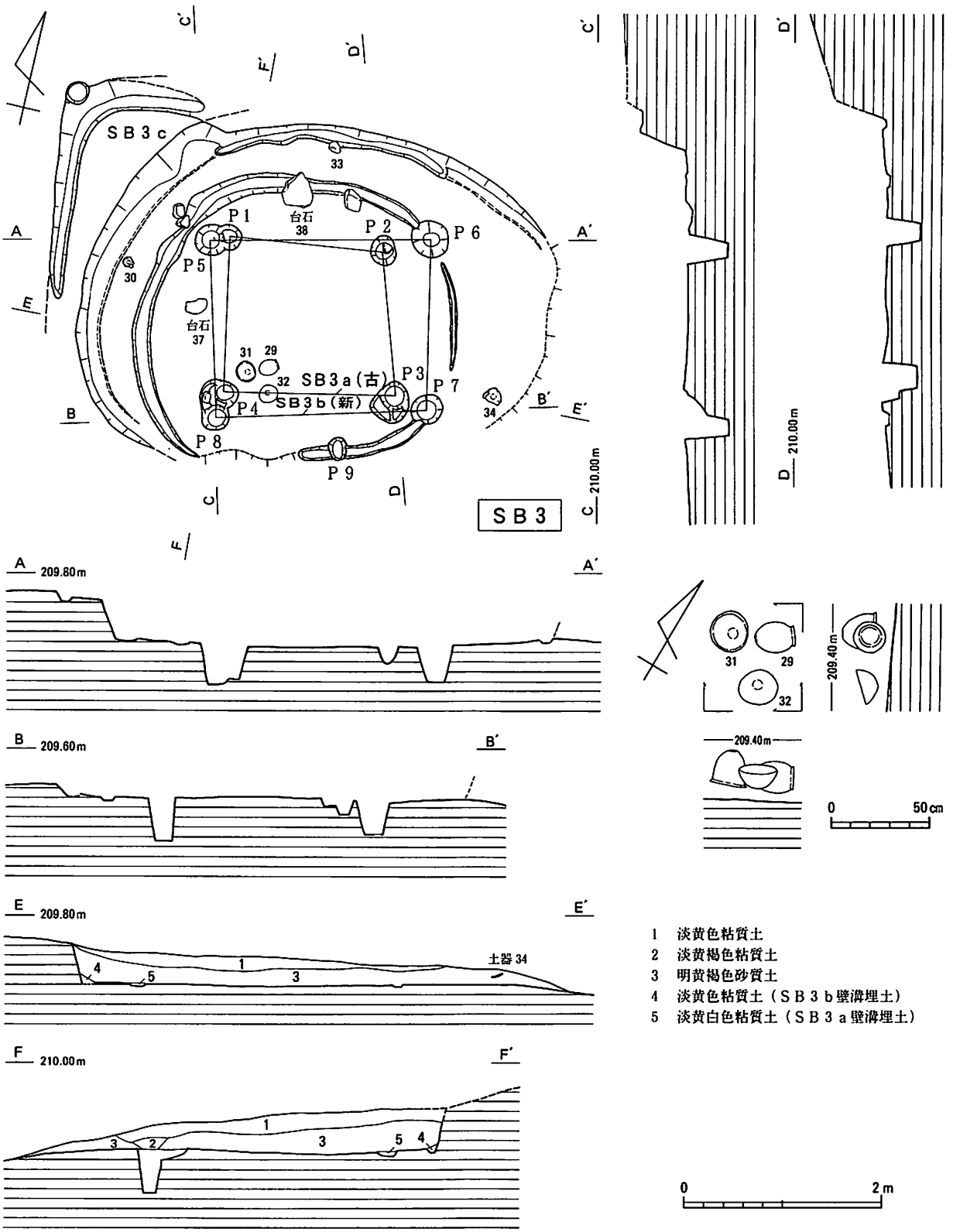
各主柱穴の規模は，ＳＢ３ａのＰ１が径25cm，深さ36cm，Ｐ２が長径30cm×短径25cm，深さ36cm，Ｐ３が長径41cm×短径35cm，深さ35cm，Ｐ４が径38cm，深さ37cm，ＳＢ３ｂのＰ５が径31cm，深さ41cm，Ｐ６が長径39cm×短径36cm，深さ38cm，Ｐ７が長径34cm×短径30cm，深さ36cm，Ｐ８が径27cm，深さ45cmである。ＳＢ３ａの主柱穴は長径25～41cm（平均34cm），短径25～35cm（平均28cm），深さ35～37cm（平均36cm），ＳＢ３ｂの主柱穴は長径27～39cm（平均33cm），短径27～36cm（平均31cm），深さ36～45cm（平均40cm）である。ＳＢ３ａとＳＢ３ｂは柱穴の平面規模はほぼ同じだが，深さは若干ＳＢ３ｂの方が深い。これは住居規模（上屋の大きさ）が反映していると考えられる。

なお，ＳＢ３ａの南辺の壁溝と重複して，長径22cm×短径18cm，深さ24cmの小ピット（Ｐ９）が存在する。

炉跡　ＳＢ３に伴う炉跡は存在しない。また，焼土や炭化材などの広がりもみられない。

出土遺物（第13・14図，図版11）　出土点数はそれほど多くないが，土器の多くは完形か大きな破片で，大半が床面からの出土である。図示できたのは，弥生土器７点，石製品３点の10点である。

完形の土器３個体（29・31・32）が住居跡南西部（Ｐ８北東）で出土した。西側の甕31は伏せ



第12図　SB3実測図（1：30，1：60）

た状態で，東側の甕29は口を東に向けて横転した状態で，そしてこれらの南側に鉢32が口縁を上に向けたほぼ正置の状態で出土した。その他，ＳＢ３ｂ西辺の壁溝際（甕30），同じく北辺の壁溝際（底部片33）や南東部の床面（底部片34）で比較的大きな土器片が出土している。なお，28の甕口縁部片は覆土からの出土である。

石製品は，ＳＢ３ａの北辺中央壁溝上で台石38が，同じく西辺壁溝内側の床面上で台石37が出土した。砥石36は覆土からの出土である。

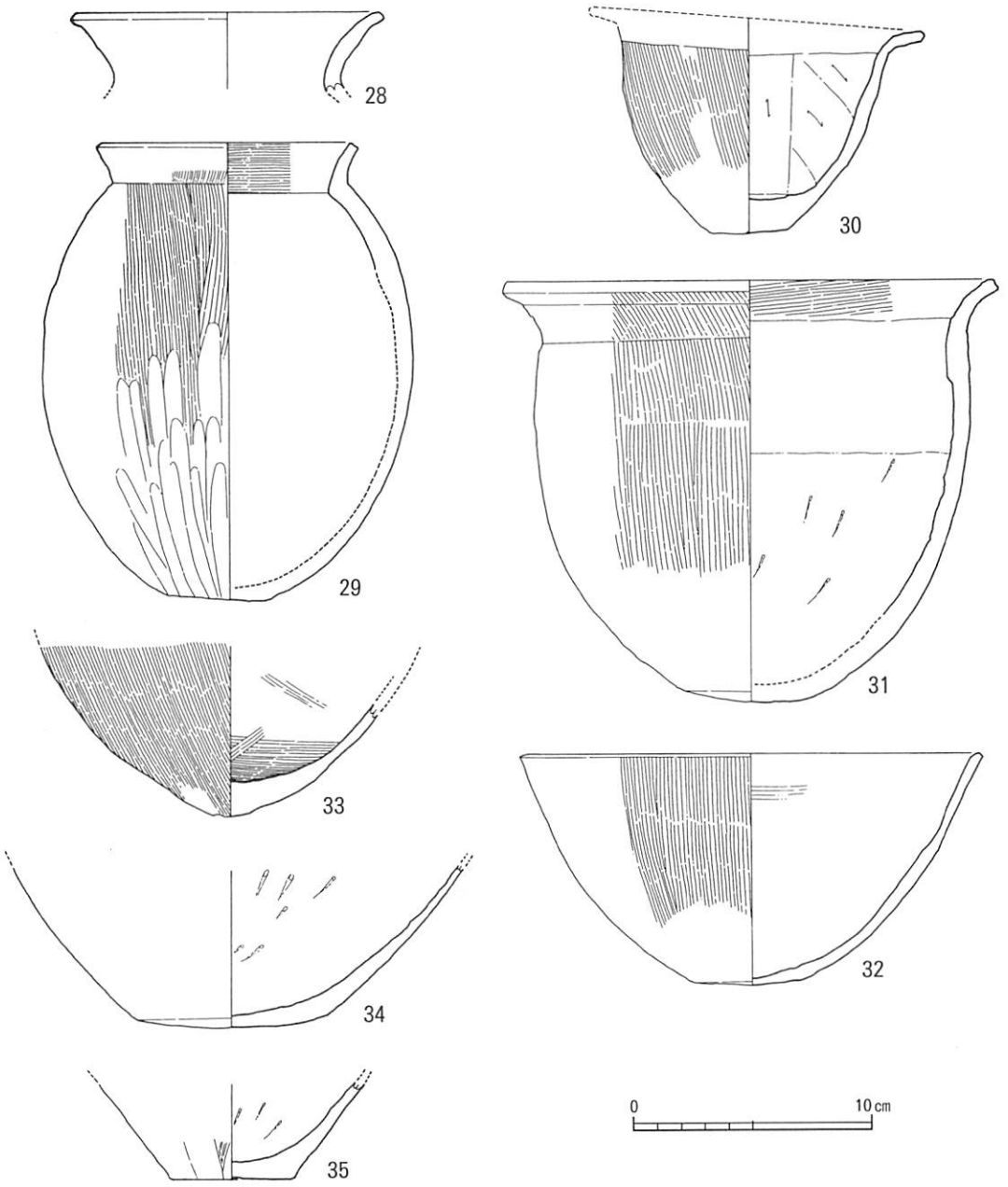
① 弥生土器（28～34） 甕・鉢・底部片がある。

28～31は甕で，29・31は完形品である。28は復元口径12.8cmの口縁部片で，比較的よく締まった頸部から外湾気味に外上方に立ち上がった口縁部の端部を平坦に納める。調整は内外面ともに横ナデである。29は口径10.5cm，頸径9.9cm，体部最大径15.5cm，底径4.4cm×5.0cm，器高19.4cmの完形品である。最大径部は体部中位にあり，緩やかに窄まった頸部からやや外湾気味に外上方に立ち上がったごく短かい口縁部の端部を平坦に納める。口縁端面の縁辺は内外とも比較的鋭い。体部は膨らみがそれほど強くないものの整美な長胴である。底部は小さな平底で，体部との境界は緩やかな稜を介し，やや不鮮明である。調整は，内面は口縁部が横方向の細かいハケ目で，明瞭な稜を介した体部は不鮮明ながらナデ調整とみられる。外面は，口縁部が端面ともに横ナデ，体部上半が縦方向の細かいハケ目，下半から外底面にかけてハケ目ののち縦方向のヘラミガキを施している。体部下半の外面に部分的に赤色顔料状のものの付着がみられる。色調は黄褐色で，胎土には１mm内外の砂粒を比較的多く含んでいる。30は破片の欠失や歪みが著しいが，口径14.2～14.7cm，器高10cm程度の小型甕と考えられる。底径3.0×3.3cmの小さく部厚い平底の底部から開き気味に外上方に内湾しながら延びて，頸部で直角に近く屈曲し水平気味に外方に延びた口縁部の端部を丸く納めている。底部と体部の境界はごく緩やかな稜で介されており，やや不明確である。調整は，内面は口縁部が不明だが，体部は斜めあるいは縦方向の板ナデである。外面は，口縁部が横ナデ，体部上半が縦あるいは斜め方向のハケ目，下半は不明確だがナデ調整とみられる。外底面は丁寧なナデを施している。31は口径19.3cm×20.3cm，頸径17.9cm，体部最大径18.3cm，底径5.8cm，器高17.8cmの完形品である。やや丸みを帯びた平底の底部から内湾しながら外上方に立ち上がり，上半にある最大径部からやや内傾気味に直立して締まりのない頸部に続く。頸部で緩やかに外反して，外湾気味に外上方に短く延びた口縁部の端部を平坦に納める。調整は，内面は口縁部が横方向の粗いハケ目，体部上半は未調整，中位から下半は縦方向のヘラケズリである。外面は，口縁部が斜め方向の幅広のハケ目，体部が上位２／３は縦方向のハケ目，下位１／３は器壁の損耗により調整不明である。部分的にススの付着がみられる。色調は外面が淡茶褐色～淡黄褐色，内面・胎土は黄褐色で，胎土は３mm以下の大きさの砂粒を多く含む。

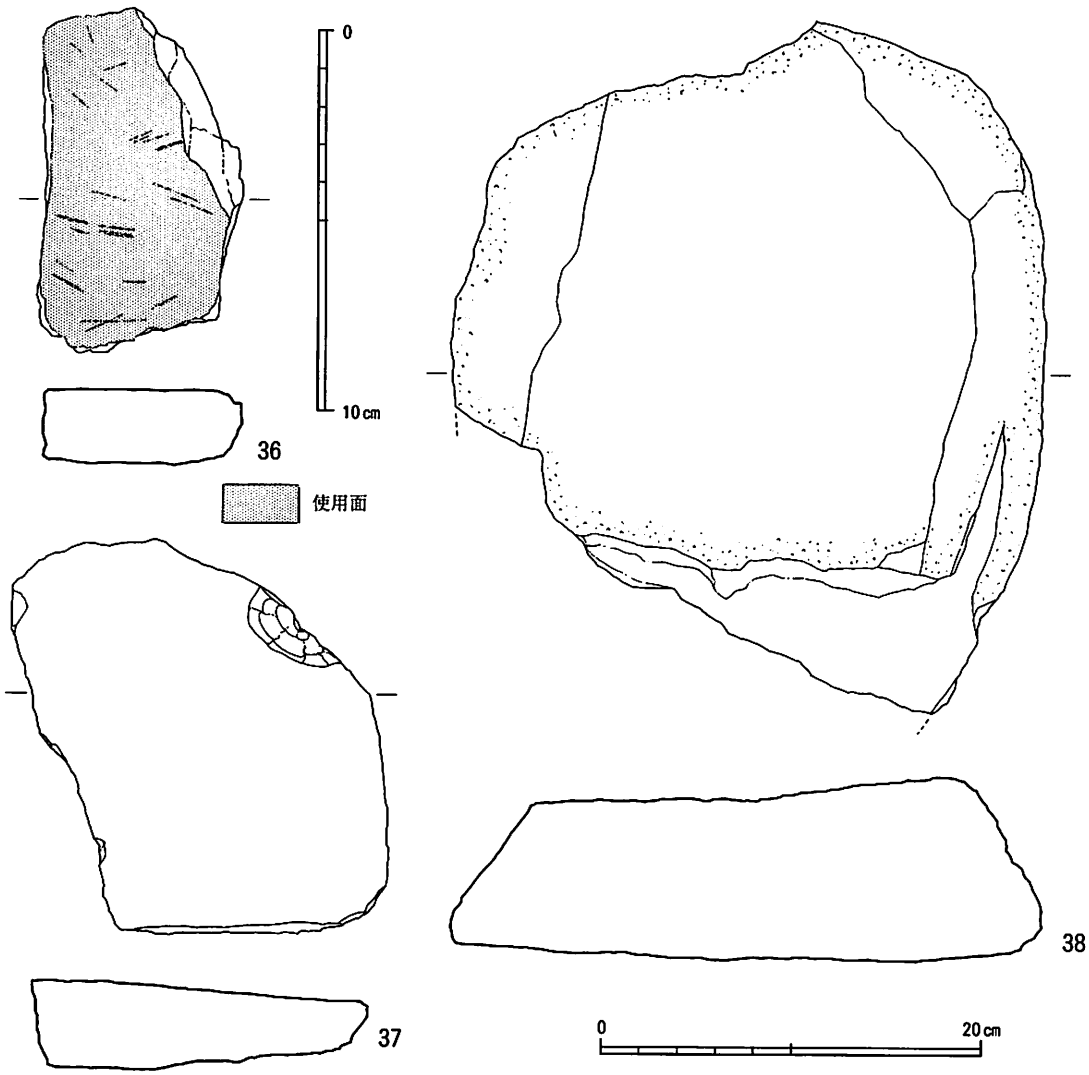
32は鉢の完形品で，口径18cm×19cm，底径4.4cm，器高9.8cmである。底部は小さな平底で，体部との境界は緩やかな稜で介されており，やや不明瞭である。底部から外上方に緩やかに内湾しながら開き気味に延び，口縁部の端部を平坦に納める。口縁端面の縁辺は内外とも鋭い。調整は，内面が口縁部はナデ，体部上端付近にごく部分的に横方向の粗いハケ目が認められるが，その他

は器壁の剥落で調整は不明，外面は上位２／３が縦方向の粗いハケ目で，下位１／３から外底面にかけては器壁の損耗が顕著で調整不明である。色調は淡黄褐色で，胎土には２～３㎜大の砂粒を比較的多く含む。

33・34は底部片である。33は尖底状で明確な底部は分からない。調整は，内面は内底面主体に横方向の密なハケ目，外面はやや傾いた縦方向の密なハケ目を施す。色調は表面が暗黄褐色，胎土は黒褐色で，胎土には３㎜以下の大きさの砂粒を多く含む。34は底径8.0㎝の丸みを持った平底の底部で，内面は縦方向のヘラケズリを施す。外面の調整は不明である。色調は淡黄褐色で，胎土に３㎜以下の大きさの砂粒を多く含む。



第13図　ＳＢ３・調査区内出土土器実測図（１：３）



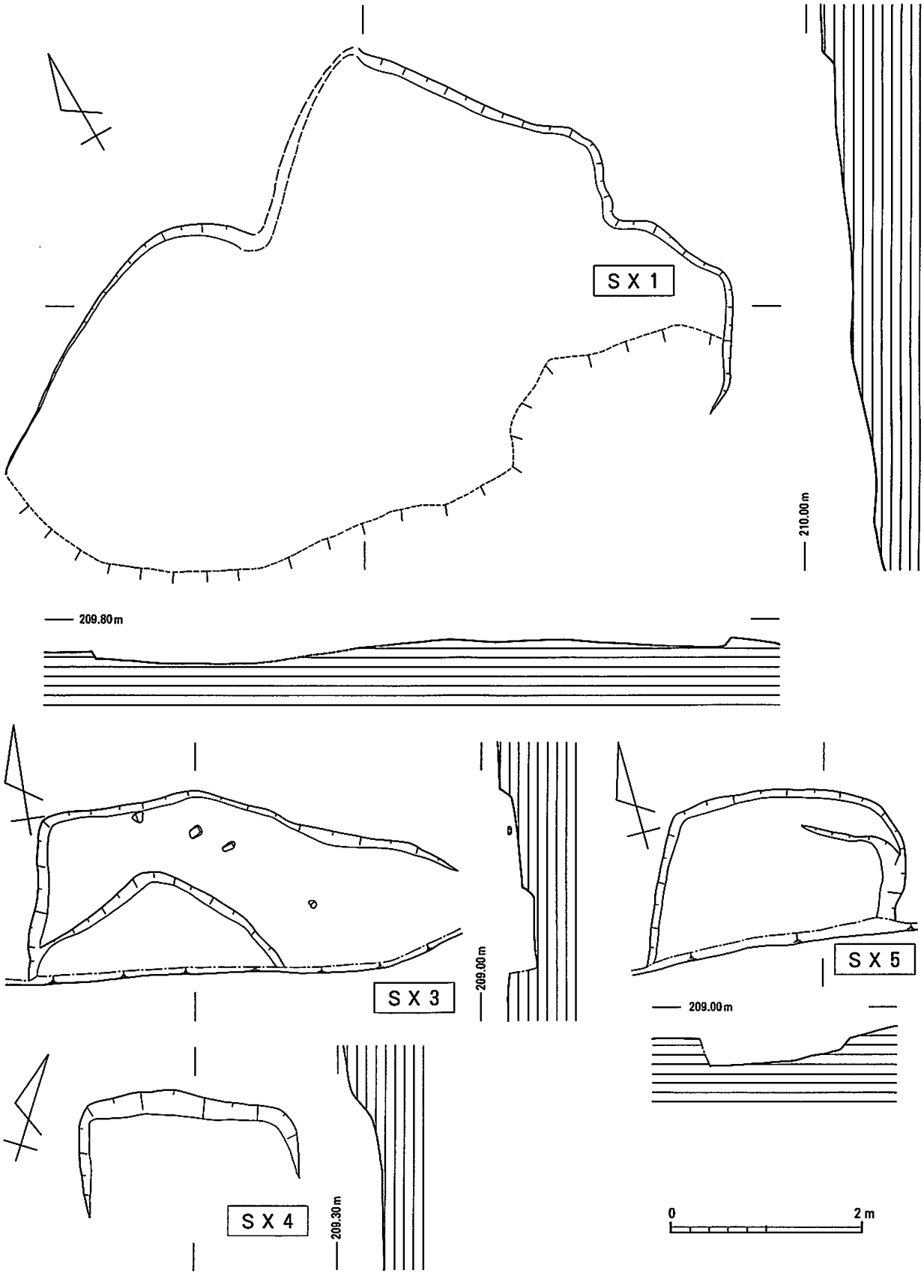
第14図　ＳＢ３出土石製品実測図（１：２，１：４）

② 石製品（36～38） 砥石・台石がある。

36は黄白色の軟質の珪長岩を石材とする砥石で，長さ9.0cm，幅5.4cm，厚さ2.0cm，重さ161.51ｇである。表面が使用面で，平滑な面に横方向を主体とする短い擦痕が散在的にみられる。

37・38は台石である。37は長さ20.7cm，幅19.7cm，厚さ4.6cm，重さ2,442ｇで，淡灰黄色の結晶凝灰岩を石材とする。平滑な表面を使用面とする。38は長さ36.2cm，幅31.2cm，厚さ10.2cm，重さ14,790ｇと今回の出土石製品の中で最も大型品である。灰黄色の石英斑岩を石材とし，使用面は比較的平坦な表面で，浅い凹凸が顕著で平滑ではない。下端は節理に沿って割れている。

２．性格不明の遺構　調査区南半において５基（ＳＸ１～５）検出した。ＳＸ２以外は地面をカットした段状をなす。平面形は不明確で，出土遺物も皆無に近く，その性格については明確にできない。なお，ＳＸ２・３・５は南側調査区外に遺構の一部が延びている。



第15図　ＳＸ１・３～５実測図（１：60）

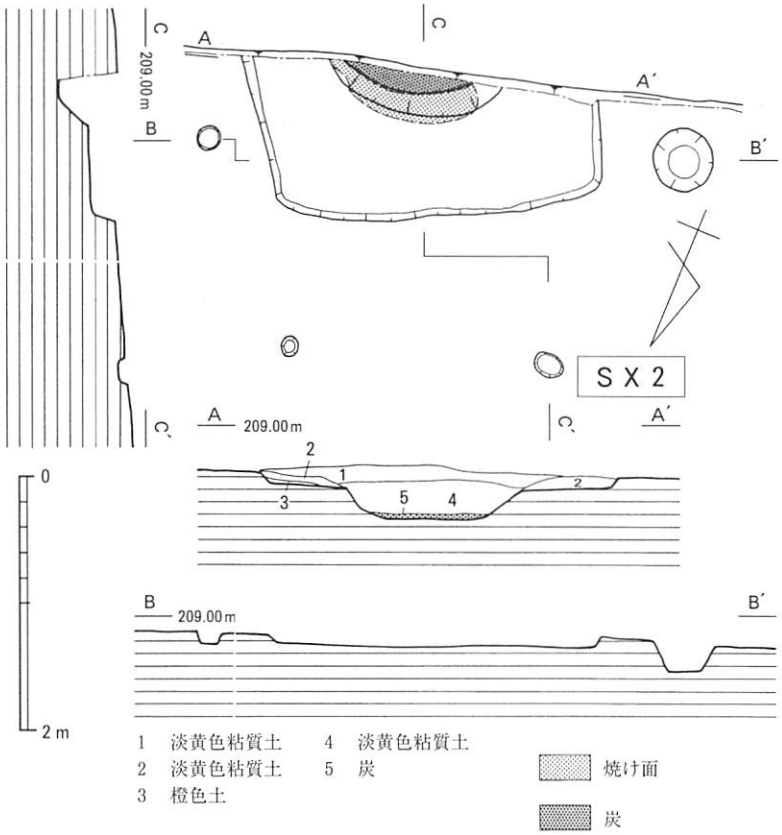
(1)　ＳＸ１（第15図，図版９ｅ）

調査区南西部の緩斜面に立地する（標高209.5ｍ）。平面形は不整方形で，東西7.88ｍ×南北5.80ｍ，壁高（最大）20㎝（北辺中央）である。床面は，北から南方向に傾斜しており，最大高低差は40㎝ほどである。遺物の出土はない。

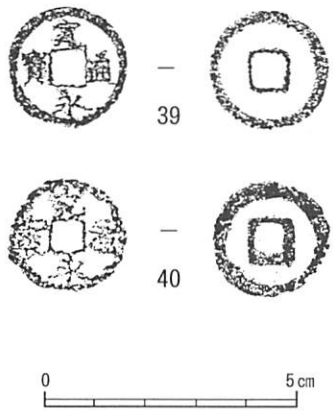
(2)　ＳＸ２（第16図，図版８）

調査区南端中央にあり，その１／２以上が南側調査区外に延びているため，全容を窺うことができない。ほかの性格不明の遺構とは少し様相を異にし，二段掘りの中央坑内が焼けており，底には厚さ４㎝ほど炭化材が堆積していた。中央坑内の焼成は壁面を中心にみられ，底面には殆ど及んでいない。壁面の焼成は顕著で，上端では最大６㎝ほどの熱の浸透がみられることから，中央坑内において恒常的に強く火熱を受ける状態であったと考えられる。

一段目の土坑の平面形は方形で，残存部分の規模は北辺2.57ｍ，西辺（現存規模）0.64ｍ，東辺（現存規模）1.20ｍ，深さ（最大）11㎝である。底面は北から南にやや下傾しており，その最大高低差は13㎝である。二段目の土坑は平面形が円形で，残存部分から復元した直径1.7ｍ，深さ（最大）23㎝である。周囲には小ピット４基があり，上屋が存在した可能性がある。小ピットは一段目の土坑から31～112㎝の位置にあり，ピット間の距離は1.78～2.06ｍである。これらのピットは一段目土坑の北辺と東辺の３基のピットは径14～24㎝，深さ７～11㎝と小型であるが，西辺



第16図　ＳＸ２実測図（１：60）



第17図　ＳＸ２出土古銭拓影（２：３）

のピットは長径49cm×短径46cm，深さ25cmとやや大型である。ピットの並びは必ずしも整然とはしていない。なお，中央坑の坑底の炭化材に混じって古銭２点（寛永通寶）が出土した。

このＳＸ２については，その強い熱を恒常的に受けていたと考えられることや寛永通寶の出土などから，近世の火葬遺構あるいは火葬墓的性格が想定される。

出土遺物（第17図，図版11） 古銭（寛永通寶）２点（39・40）がある。いずれも銭径2.4cmで，比較的銭銘が明確な39が新寛永（1697年以降鋳造），40は「永」以外は銭銘がやや不鮮明だが，古寛永（1636～1640年・1656～1659年鋳造）と考えられる。

(3) ＳＸ３（第15図，図版９ｇ）

調査区南端中央にあり，ＳＸ２の西側に近接して存在する。遺構の南半が南側調査区外に延びており，全容は明らかにできないが，平面形は不整方形と考えられる。二段掘りになっており，現存規模は東西4.3m×南北1.7m，深さ（最大）14cm（一段目－西辺中央），15cm（二段目－北辺中央）である。土器片が出土したが，小破片のため図示できなかった。

(4) ＳＸ４（第15図，図版９ｇ）

調査区南半にあり，ＳＸ３の北側に近接するが，北東にＳＢ３，北西にＳＸ１がいずれもごく近くに存在する。平面形コ字状に緩斜面をカットした小さな段状をなし，東西2.3m×南北1.16m，深さ（最大）22cm（北西隅）の規模である。出土遺物はない。

(5) ＳＸ５（第15図，図版９ｈ）

調査区南端中央にあり，ＳＸ３の西側に近接して存在する。東半に部分的に段が形成される。平面形はほぼ方形で，南半部が南側調査区外に延びているため，全容は不明である。現存規模は，東西2.52m×南北1.64m，深さ（最大）21cm（北西隅）である。出土遺物はない。

３．ピット群（第４図） 調査区内の北側緩斜面及び南西緩斜面，そしてＳＸ１周辺にピットが散在する。いずれも明確な建物跡を形成せず，また覆土もＳＢ・ＳＸの覆土が淡黄色粘質土であるのに対して，これらのピットはいずれも褐色ないしは黄褐色土で，より新しい時期のものと考えられる。ピットの規模は，径18～36cm，深さ８～36cmとそれほど大きくはない。遺物が出土したピットはない。

４．調査区内出土の遺物（第13図） 35は弥生土器・底部片で，南西斜面で出土した。底径5.0～5.3cmの平底の底部から明瞭に屈曲して，外上方に直線的に延びる体部に続く。調整は，内面が縦方向のヘラケズリ，外面は下端付近に縦方向の板ナデあるいはハケ目が看取される。外底面の調整は不明である。

第1表　遺物一覧表　単位cm・g　　＊；復元値，括弧；現存値

(1)　弥生土器

遺物No.	器　種	出土遺構	口　径	器高	底　径
1	壺	SB1	＊12.2	−	−
2	甕	SB1	−	−	−
3	甕	SB1	−	−	−
4	甕	SB1	＊16.4	−	−
5	鉢	SB1	＊22.5	−	−
6	高　杯	SB1	−	−	−
7	高　杯	SB1	−	−	−
8	底部片	SB1	−	−	＊2.8
9	底部片	SB1	−	−	＊3.3
10	底部片	SB1	−	−	＊3.2
11	底部片	SB1	−	−	＊3.8
12	底部片	SB1	−	−	＊4.8
13	底部片	SB1	−	−	＊3.2
14	底部片	SB1	−	−	＊3.2
15	底部片	SB1	−	−	＊3.7
16	底部片	SB1	−	−	＊4.0
21	甕	SB2	＊21.4	−	−
22	甕	SB2	＊28.6	−	−
23	甕	SB2	−	−	−
24	底部片	SB2	−	−	＊4.0
25	底部片	SB2	−	−	＊4.4
28	甕	SB3	＊12.8	−	−
29	甕	SB3	10.5	19.35	4.4×5.0
30	甕	SB3	＊14.2×14.7	−	3.0×3.3
31	甕	SB3	19.3×20.3	17.8	5.8
32	鉢	SB3	18.0×19.0	9.8	4.4
33	底部片	SB3	−	−	−
34	底部片	SB3	−	−	8
35	底部片	南西斜面	−	−	5.0×5.3

(2)　石製品

遺物No.	器　種	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材
18	砥　石	SB1	7.8	3.75	2.9	161.26	溶結凝灰岩
19	砥　石	SB1	12.6	8.65	4.2	456	凝灰岩
20	砥　石	SB1	18.8	12.35	6.15	1,942	珪長岩
26	スクレイパー	SB2	9.5	4.7	1.1	40.68	無斑晶安山岩
27	台　石	SB2	27.0	22.4	6.4	6,860	黒雲母花崗岩
36	砥　石	SB3	9.0	5.4	2.0	161.5	珪長岩
37	台　石	SB3	20.7	19.7	4.6	2,442	結晶凝灰岩
38	台　石	SB3	36.2	31.2	10.2	14,790	石英斑岩

(3)　鉄器　「厚さ」；単位mm

遺物No.	器　種	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重さ
17	鉄　鏃	SB1	(6.9)	(3.1)	2.5	12.02

(4)　古銭

遺物No.	銭種①	銭種②	出土遺構	銭径
39	寛永通寶	新寛永	SX2	2.4
40	寛永通寶	古寛永	SX2	2.4

V まとめ

下郷遺跡は南流する黒瀬川東岸の南から北に延びる丘陵上に立地する弥生時代後期の集落跡である。ここでは，検出した3軒の竪穴住居跡と出土土器について検討し，まとめにかえたい。

(1) 竪穴住居跡について

①立地　本集落跡が立地する丘陵上からは西側約180°の眺望が開け，蛇行しながら黒瀬盆地を流れる黒瀬川の姿がみえる。しかし，ＳＢ１は丘陵最高所の頂部に立地するものの，ＳＢ２は南東側緩斜面に，ＳＢ３は南側緩斜面に立地しており，この眺望に背を向けている。各住居の床面の海抜標高をみてみると，ＳＢ１が210.3m，ＳＢ２・ＳＢ３ｃが209.6m，ＳＢ３ａ・３ｂが209.1mと50～70cmの差がある。

②主軸方位　ＳＢ１がほぼ東西方向，ＳＢ２が北西－南東方向，ＳＢ３ａ・３ｂがやや西に振れた南北方向を指している。

③住居の平面形　ＳＢ１ａ・１ｂ，ＳＢ３ａ・３ｂが楕円形，ＳＢ２が丸みの強い隅丸方形，ＳＢ３ｃが隅丸方形である。ＳＢ３ｃ以外は円形気味であり，これらの平面形態の長軸の長さ／短軸の長さの値を今仮に楕円形度として計測してみると（楕円形度１＝正円），ＳＢ１ａ＝1.24，ＳＢ１ｂ＝1.12，ＳＢ２ａ・２ｂ＝1.09，ＳＢ３ａ＝1.12，ＳＢ３ｂ＝1.44となる。ＳＢ２ａ・２ｂが最も正円というか正・隅丸方形に近く，ＳＢ３ｂが最も楕円形度が高い。

④住居の規模・床面積　ＳＢ１ａが6.8m×5.5m（25.06m²），ＳＢ１ｂが7.08m×6.3m（30.86m²），ＳＢ２ａ・２ｂが5.38m×4.94m（16.72m²），ＳＢ３ａが3.3m×2.94m（6.25m²），ＳＢ３ｂ（現存規模）が4.9m×3.4m（13.08m²）となる。ＳＢ１ｂが最大規模で，ＳＢ３ａが最も小さい。因みに，この最小規模のＳＢ３ａの床面積6.25m²を１とすると，ＳＢ１ａ＝4.01（約４倍），ＳＢ１ｂ＝4.94（約５倍），ＳＢ２ａ・２ｂ＝2.68，ＳＢ３ｂ＝2.09（約２倍）となり，最大規模のＳＢ１ｂの床面積はＳＢ３ａのそれの５倍となる。

⑤主柱穴　７軒の住居跡のうち，柱構造が判明するのはＳＢ３ｃを除く６軒である。ＳＢ１ａは７本柱の多柱穴で，そのほかの４軒はいずれも４本柱である。これら４本柱構造の住居の大半が方形に柱を配しているが，ＳＢ１ｂの柱の配置は菱形である。

第２表　竪穴住居跡一覧表　＊　①単位；床面積＝m²，柱穴規模＝cm，その他＝m。②柱間距離・柱穴規模の数値は平均値。③括弧；現存規模

遺構No.	立地	主軸方位	床面の標高	平面形	住居規模		床面積	柱穴数	柱間距離	柱穴規模		
					長軸	短軸				長径	短径	深さ
ＳＢ１ａ	尾根頂部	N94° E	210.3	楕円形	6.8	5.5	25.06	7	1.83	49	38	57
ＳＢ１ｂ		N88° E		楕円形	7.08	6.3	30.86	4	2.83	41		69
ＳＢ２ａ	南東緩斜面	N52° W	209.6	隅丸方形	5.38	4.94	16.72	4	2.75	61	44	47
ＳＢ２ｂ		N47° W						4	2.11	38	34	48
ＳＢ３ａ	南緩斜面	N15° W	209.1	楕円形	3.3	2.94	6.25	4	1.59	34	28	36
ＳＢ３ｂ		N13° W		楕円形	(4.9)	(3.4)	(13.08)	4	1.98	33	31	40
ＳＢ３ｃ		－	209.6	隅丸方形	－	－	－	－	－	－	－	－

主柱穴間の距離は，多柱穴のＳＢ１ａが平均1.83m，その他の４本柱の住居５軒は平均で1.59～2.83mである。住居規模に比例して，ＳＢ１ｂの柱間距離が最も長く，ＳＢ３ａが最も短い。ＳＢ１ｂ・ＳＢ２ａ・ＳＢ３ａでは四辺の柱間距離がほぼ等しいが，ＳＢ２ｂ・ＳＢ３ｂでは住居の長軸方向の二辺と短軸方向の二辺では少し異なる。ＳＢ２ｂでは長軸方向の二辺は柱間距離が等しく2.26m，短軸方向の二辺は1.88m・2.04mと短い。同じくＳＢ３ｂでも長軸方向の二辺が2.14m・2.22mであるのに対して，短軸方向の二辺は1.74m・1.80mである。本遺跡では平面形が正円や四辺の長さがほぼ等しい隅丸方形の住居跡はなく，いずれも楕円形ないしはやや一方に長い隅丸方形である。しかも，いずれも住居の主軸に対して横方向に長く，尾根頂部に位置するＳＢ１は別として他はいずれも長軸が緩斜面の等高線に沿っている。楕円形度については既述の通りだが，主柱穴の配置状況についても似た状況が窺える。ＳＢ１ａの主柱穴は７本の主柱を多角形に配した多柱穴だが，その配置状況はほぼ住居の長軸に沿って扁平な多角形をなしている。また，ほかの４本柱の住居についてはＳＢ２ｂ・３ｂ以外の３軒（ＳＢ１ｂ・２ａ・３ａ）も長軸方向の二辺の柱間距離が短軸方向の二辺に較べて長い。これを数値で表すと次のようになろう（長軸方向の柱間距離を短軸方向の柱間距離で割った数値を仮に長方形度とする。長方形度１＝正方形）。ＳＢ１ａ（楕円形度1.24）＝長方形度1.20，ＳＢ１ｂ（楕円形度1.12）＝長方形度1.01，ＳＢ２ａ（楕円形度1.09）＝長方形度1.08，ＳＢ２ｂ（楕円形度1.09）＝長方形度1.15，ＳＢ３ａ（楕円形度1.12）＝長方形度1.06，ＳＢ３ｂ（楕円形度1.44）＝長方形度1.25となる。これらのことから，住居の楕円形度（住居の平面形）と主柱穴の長方形度（主柱穴の配置状況）は密接な関連性があるといえよう。

主柱穴の規模は，ＳＢ２ａの主柱穴がいずれも二段掘りで平面形が楕円形を呈するため長径がやや長めだが，このことを除けば主柱穴の平面規模はほぼ径30～40cmとあまり差がない。ただ，深さは36～69cmと差が大きい。そして，ＳＢ１が57～69cm，ＳＢ２が47～48cm，ＳＢ３が36～40cm（いずれも平均値）と柱穴規模は住居規模に比例している。柱材の大きさについては，ＳＢ１ａで２例（径18・24cm），ＳＢ１ｂで１例（径15cm）の計３例の柱痕跡を検出したのみで，ほかの住居跡については不明である。少なくとも主柱の掘方の平面規模は住居規模の違いほど差は見られず，むしろそれは主柱穴の深さに反映されていると思われる。即ち，柱材の大きさは住居規模の差ほど違いはなく，住居規模に比例して必然的に大きくなる屋根の重量は柱穴を深く掘り下げることで調整していたと考えられる。

(2) 出土土器について

竪穴住居跡からは弥生土器・鉄器（鉄鏃）・石製品（砥石・スクレイパー・台石）が出土したが，量的にはそれほど多くはない。弥生土器は壺・甕・鉢・高杯・底部片があるが，甕が多い。ここでは，住居跡毎に出土した土器を検討し[1]，各住居跡さらには本集落の時期を検討する。

ＳＢ１　壺１点，甕３点，鉢１点，高杯２点，底部片９点の計16点がある。壺１は逆「く」字状の二重口縁のものである。口縁端部を平坦に納める。甕は，２の口縁端部が下方に拡張し，端面

には凹線を施しているが，３・４は口縁端部を平坦に仕上げている。鉢５は比較的強く締まった頸部に外上方に延びる口縁が付き，その端部は平坦である。体部は最大径がかなり上方にある肩の張った器形で，この最大径部から底部に向かって比較的強く窄まって行く。底部は失っているが，体部下端の残存部の形状から部厚い底部が付くものとみられる。この形態の鉢は弥生時代後期を通じて比較的多くみられる。ただ，肩が張り底部に向かって外湾気味に窄まる形態のものは，口縁端部を拡張し，端面には凹線文を施すなどやや古い様相を示す。類例としては，東広島市・西本６号遺跡[2]ＳＢ46の219，同・天神遺跡[3]ＳＢ２の９などがある。拡張が無くなり，端面の凹線文が消失する平坦な口縁端部をもつものは，体部最大径が上方にあるものの肩が張る印象はなく，丸みの強い体部から平底の底部に続く。前者は後期前葉を中心とした時期に，後者は後期中葉～後期後葉頃に考えられている。鉢５は体部の形態は前者に似ているが，口縁端部が平坦で凹線文などを施していない点で後者の範疇に入る。高杯６は杯部に段を形成するもので，東広島市・大槇３号遺跡[4]ＳＢ25の79（後期中葉新段階），広島市・毘沙門台東遺跡Ｂ・Ｃ地点[5]第58号土壙の65（後期前葉），賀茂郡豊栄町・中屋遺跡Ｂ地点[6]ＳＸ１の406（後期中葉後半～後葉前半），世羅郡世羅町・田龍（だりゅう）遺跡[7]ＳＸ１の25（後期後半），尾道市・堂垣内（どうがいち）遺跡[8]遺物包含層の57・58（後期前半）などが比較的類似している。底部片は多く出土しているが，いずれも底径３～４cmほどのごく小さな平底で，体部下半との境界は明瞭である。

ＳＢ２　甕３点，底部片２点の計５点である。甕はいずれも口縁部片で，21・23はよく締まった頸部で「く」字状に屈曲し，外上方に延びた口縁部の端部を丸く納めている。22は口縁端部を下方に拡張し，端面には凹線状の凹みがみられるとともに，外面頸部にはヘラ状工具による刺突文が連続的に施されている。21・23と22の間には口縁端部の形態・施文の点で時期差が見られる。本遺跡出土土器のなかでは後者にやや古い様相が見られ，逆に前者に新しい様相がみられる。底部片はいずれも小さな平底で，体部と底部の境界が不明瞭になっている。

ＳＢ３　甕４点，鉢１点，底部片２点の計７点である。甕28は先細り気味の口縁部の端部を平坦に納める。完形の甕29は緩やかに膨らんだ長胴の体部は最大径が中位にある。30は小型甕で，開き気味に立ち上がった体部から頸部で強く屈曲し，水平に近く延びた口縁の端部を丸く納める。甕31も完形で，最大径が体部中位より幾らか上方にあり，上半がほぼ直立し下半の膨らみが強い体部をもつ。29・31と30では口縁端部及び底部と体部下半の境界の形状に違いがみられる。29・31は短い口縁が緩やかに外反し，端部が平坦である。底部と体部下半の境界は緩やかで不明瞭である。いずれも平底ではあるが，29は外底面にやや凹凸がみられ，31は幾らか丸みを持っており，いずれも丸底化がみられる。これに対して，30は口縁端部を丸く納め，部厚い底部と体部下半の境界は緩やかではあるが明確である。32はボウル状に開いた鉢で，ごく僅かに外反気味の口縁端部は平坦に納めている。底部は小さな平底で，体部下半との境界は緩やかで不明瞭である。類例はあまり多くないが，東広島市・胡麻５号遺跡[9]ＳＢ４の39（後期後半），同・浄福寺２号遺跡[10]ＳＢ48の272（後期中葉新段階），広島市・九郎杖遺跡[11]竪穴住居跡の２（上深川Ⅲ式），同・岡谷（おかのたに）遺跡[12]第２号竪穴住居跡の10・13（後期終末）などが比較的類似している。底部片の33は尖底気

味で，広島市・毘沙門台東遺跡Ｂ・Ｃ地点第９号竪穴住居跡出土の甕（11－上深川Ⅱ式）の底部に比較的似ている。34は丸みをもつ比較的底径が大きな平底である。体部下半との境界は緩やかで不明瞭である。

ＳＢ１～３出土の土器はそれほど多くなく，ＳＢ３以外は残存状況もあまり良くない。よって，これらを単純に比較検討することは難しい。ここでは，最も出土点数が多い甕を中心にみてみると，①口縁端部が平坦である，②底部は小さな平底だが，丸みを持つものや体部下半との境界が比較的明瞭でないものが多く，丸底化の傾向がみられることなどから，本集落の時期は弥生時代後期後葉前半頃と考えられる。ＳＢ１は底部がいずれも体部下半との境界が明瞭であることからやや古く，またＳＢ２は甕口縁の端部が丸みをもつことからやや新しい様相を窺うことができる。即ち，ＳＢ１がやや時期的に先行し，次いでＳＢ３ａ・３ｂで，ＳＢ２及びＳＢ３ｃがやや後出すると考えられる。このことから，本集落の構成としては，ＳＢ１ａ（古）→１ｂ（新）とＳＢ３ａ（古）→３ｂ（新），ＳＢ２ａ（古）→２ｂ（新）とＳＢ３ｃが同時期に存在した可能性が強く，同一時期に少なくとも２軒の住居で構成されていたと考えられる。

以上のように，下郷遺跡は弥生時代後期後葉前半を中心とした時期に２軒以上の住居から成る集落であったことが判明した。今後，西条盆地南部及び黒瀬盆地における弥生時代の集落跡の調査例が増えればより詳細な検討が可能となろう。

註

(1) 西条盆地・広島湾岸を中心とした安芸南部（広島県南西部）の弥生時代後期の土器編年の検討には主に以下の文献を参考にした。

① 藤野次史「鏡西谷遺跡の弥生土器」広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ　1984年

② 藤野次史・道上康仁「安芸南部地域(西条盆地周辺)」広島県立歴史民俗資料館『広島県の弥生土器』 1985年

③ 植田千佳穂「大明地遺跡(4)まとめａ。集落跡関係の土器の位置付けについて」財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅳ) 1987年

④ 妹尾周三「安芸地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生時代の様式と編年　山陽・山陰編』 木耳社　1992年

(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西本６号遺跡』 1997年

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「天神遺跡の調査」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅲ　1993年

(4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大槇３号遺跡」『大槇遺跡群』 1985年

(5) 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990年

(6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『中屋遺跡Ｂ地点発掘調査報告』Ⅰ・Ⅱ　1998・1999年

(7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』 1997年

(8) 広島県教育委員会『堂垣内遺跡発掘調査報告』 1977年

(9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「胡麻５号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ　1990年

(10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅱ　1992・1993年

(11) 広島市教育委員会「九郎杖遺跡」『九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告』 1984年

(12) 広島市教育委員会「岡谷遺跡」『岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告』 1985年

図版 1

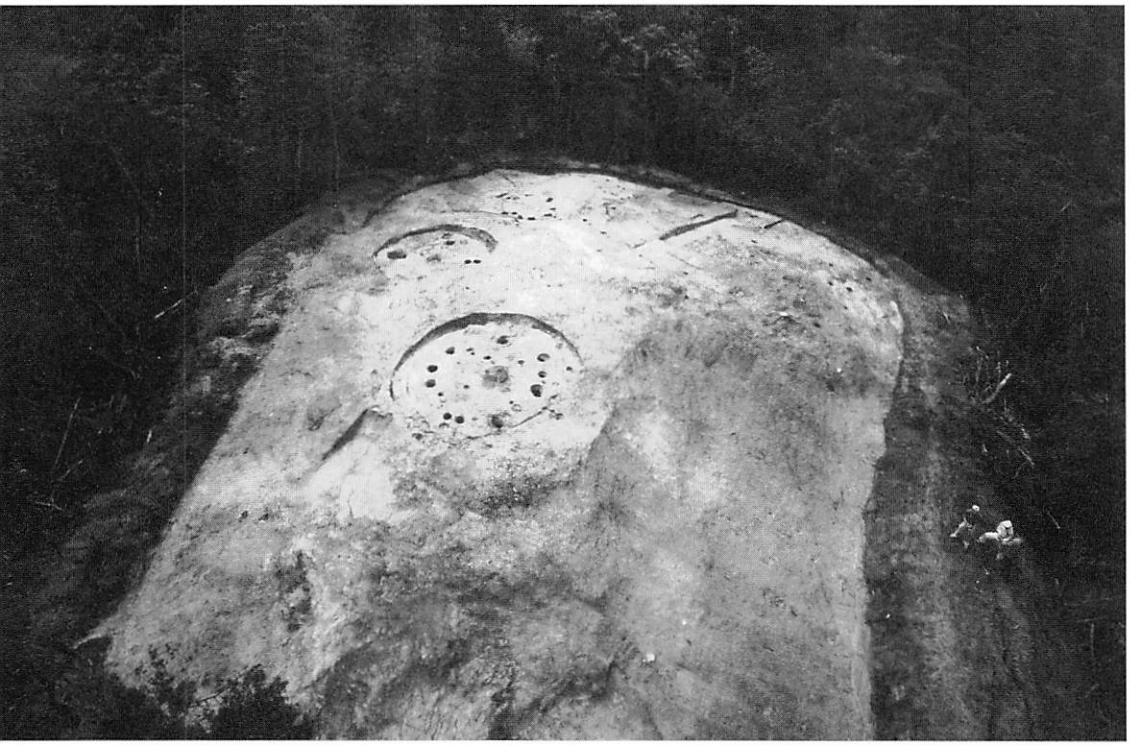
a　遺跡遠景（西から）

b　遺跡遠景（空中写真，西から）

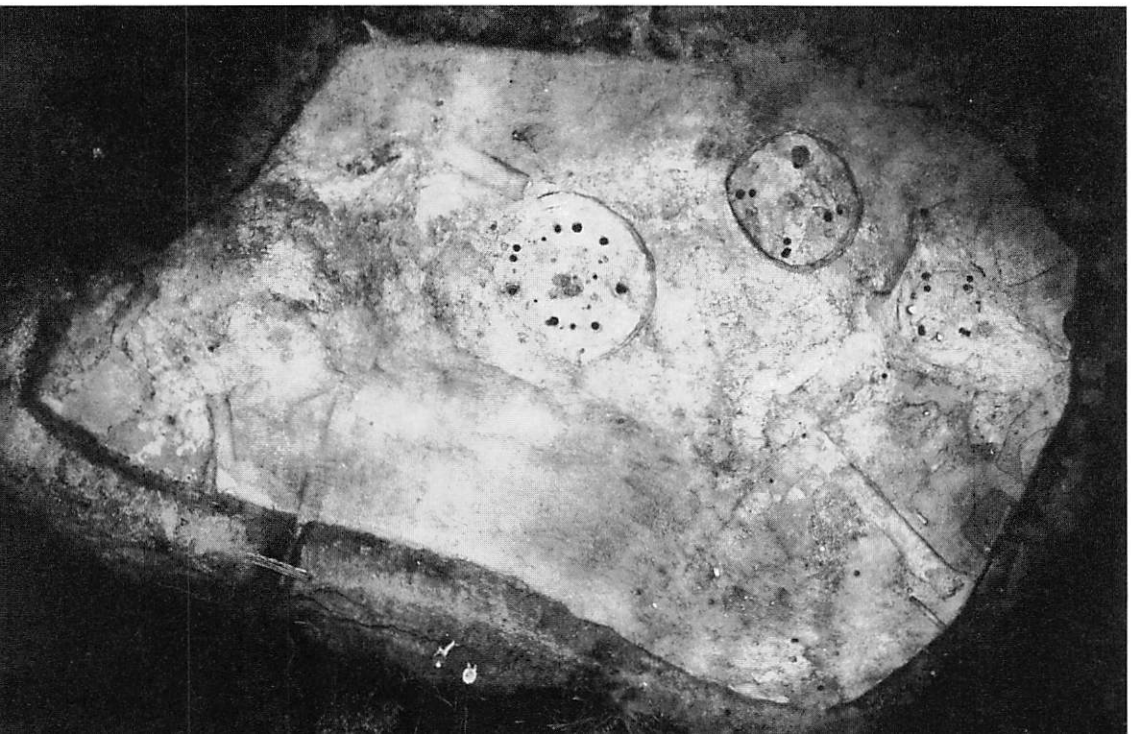
c　遺跡近景（空中写真，西から）

図版 2

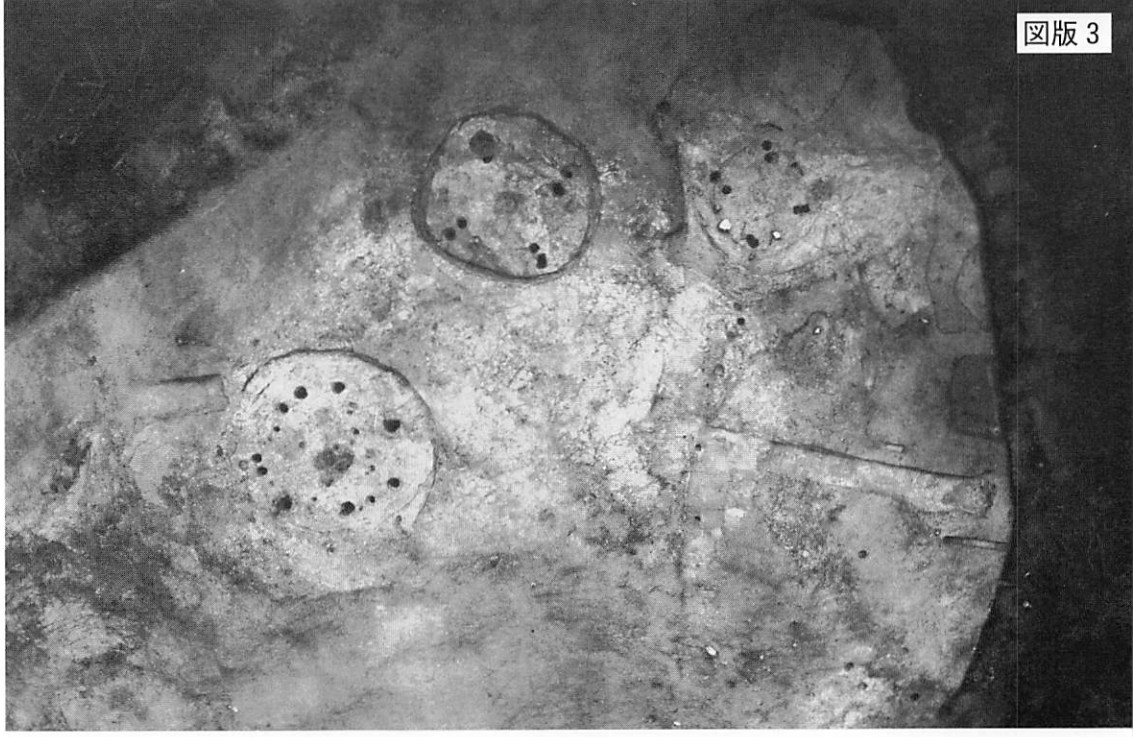
a　遺跡近景（空中写真，北から）



b　遺跡全景（空中写真，北から）



c　遺跡全景（空中写真，西から）



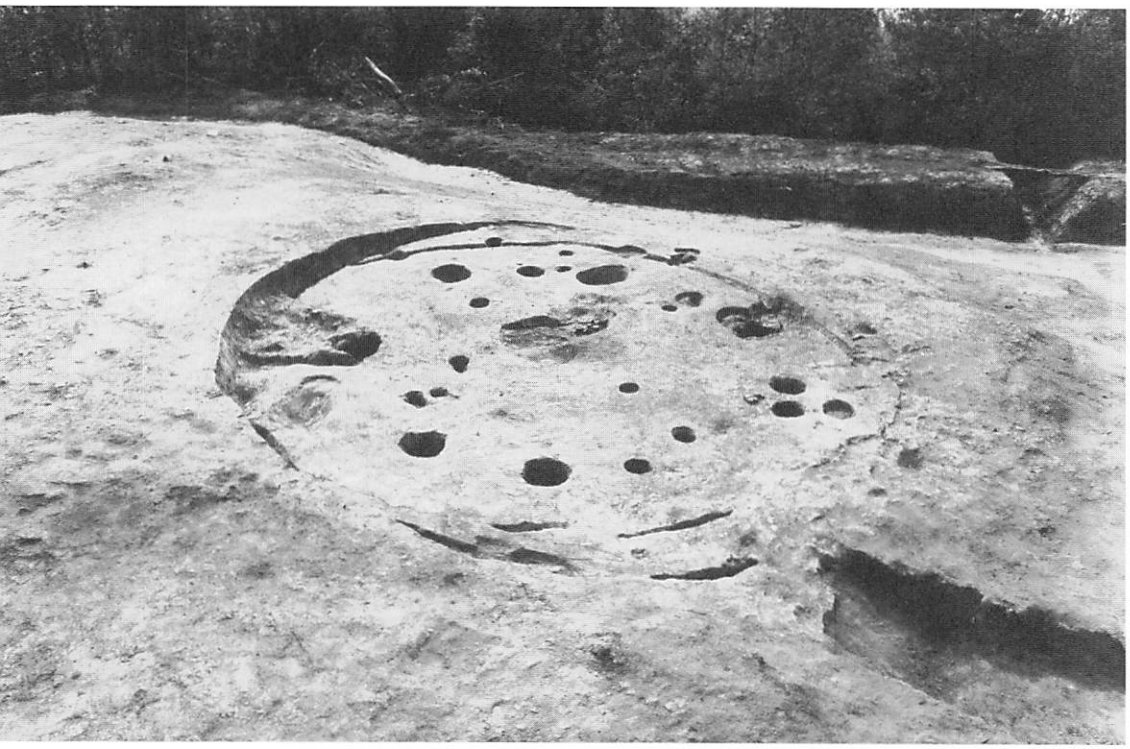
a　遺跡全景（空中写真，西から）

b　ＳＢ２・３（南から）

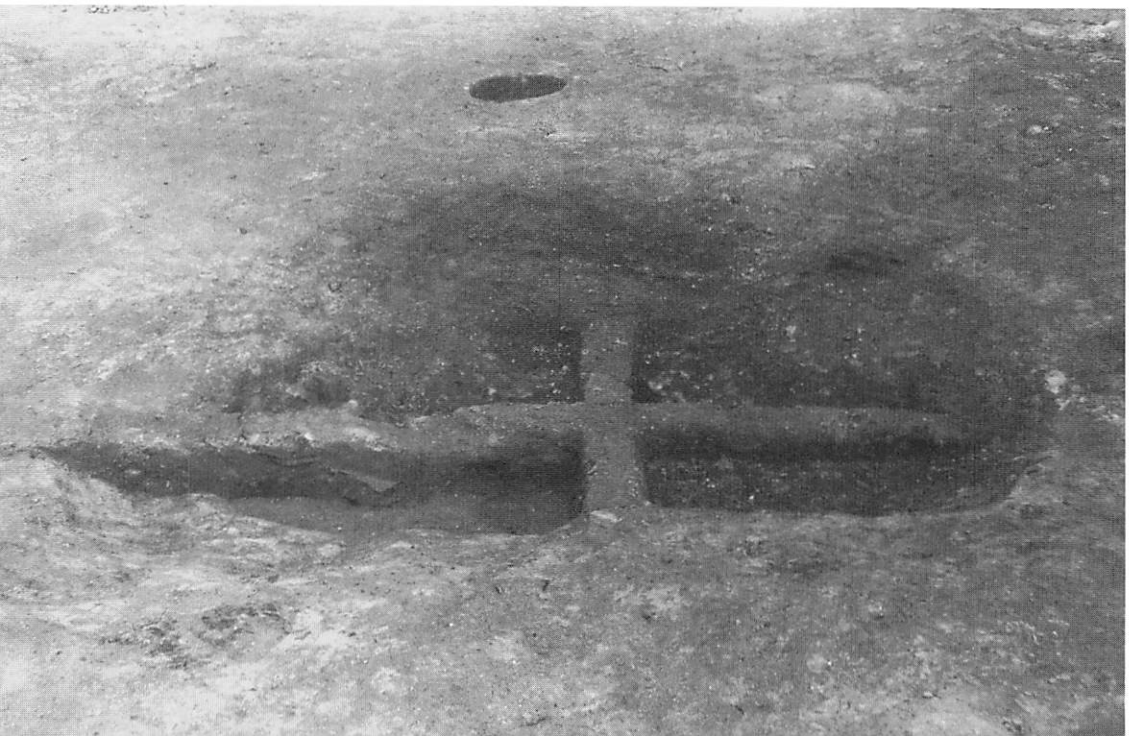
c　ＳＢ３・ＳＸ群（東から）

図版４

a　ＳＢ１（北から）



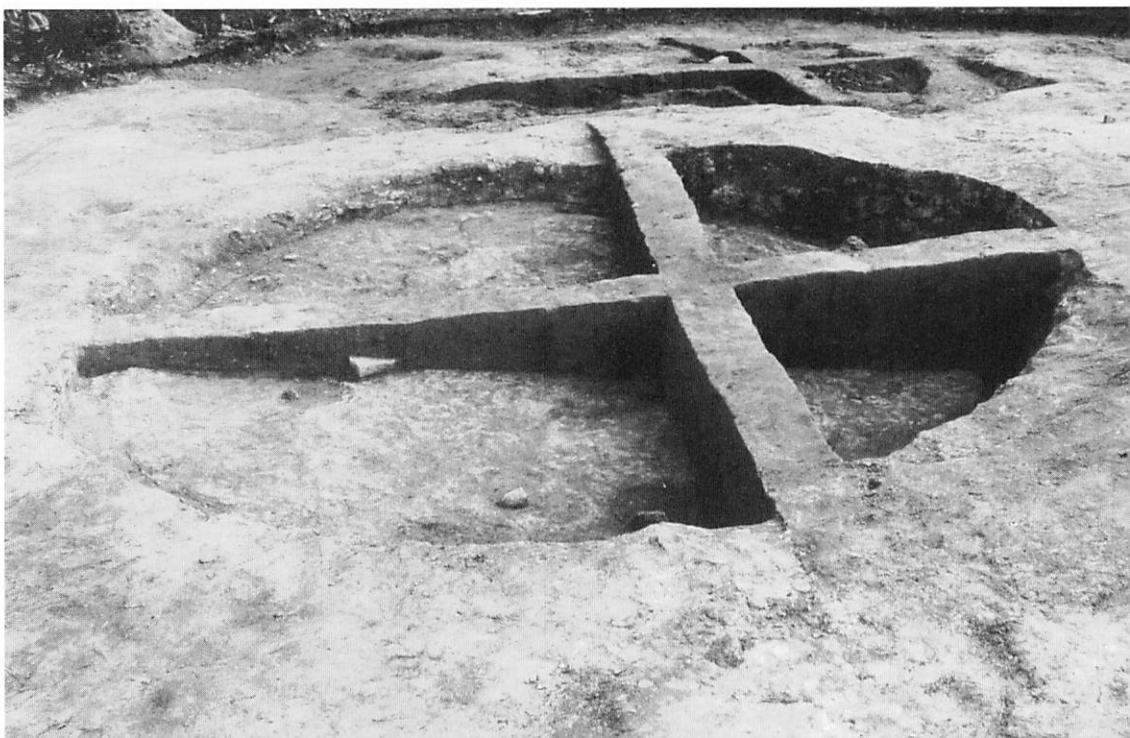
b　ＳＢ１（東から）



c　ＳＢ１炉土層
（西から）

a　ＳＢ２（東から）

b　ＳＢ２（北から）



c　ＳＢ２土層（北から）

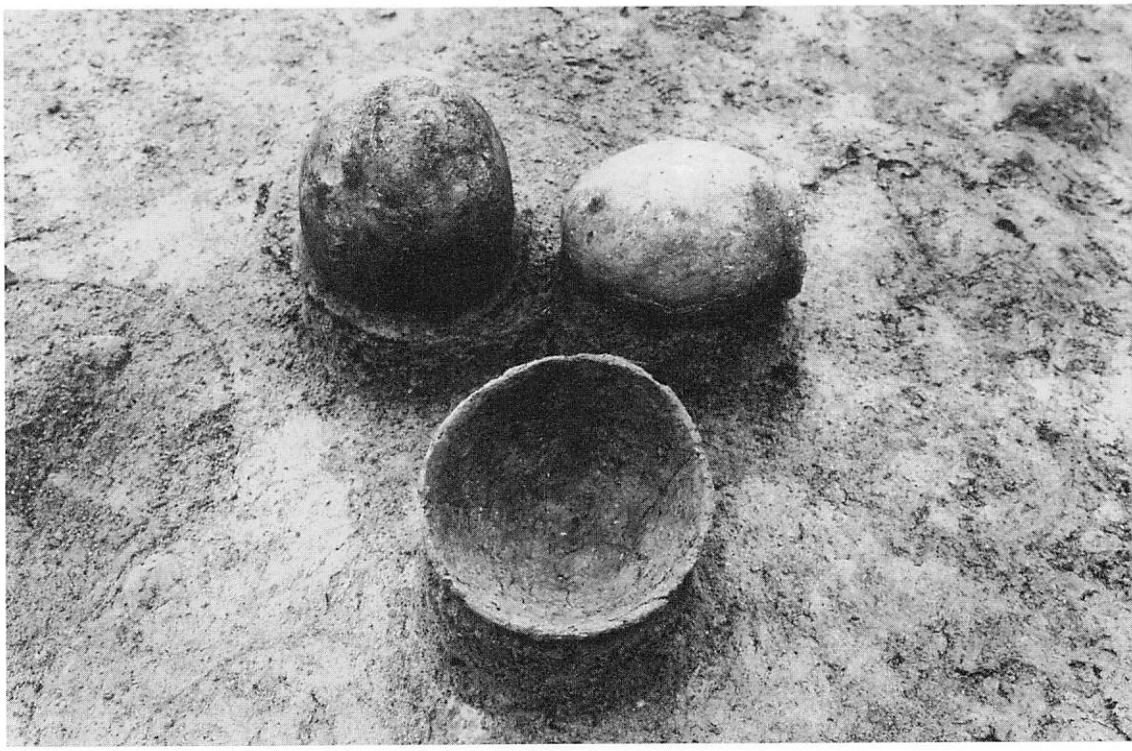
図版 6

a　ＳＢ３（南から）

b　ＳＢ３（東から）

c　ＳＢ３床面検出状況
（南から）

a　ＳＢ３土層（南から）

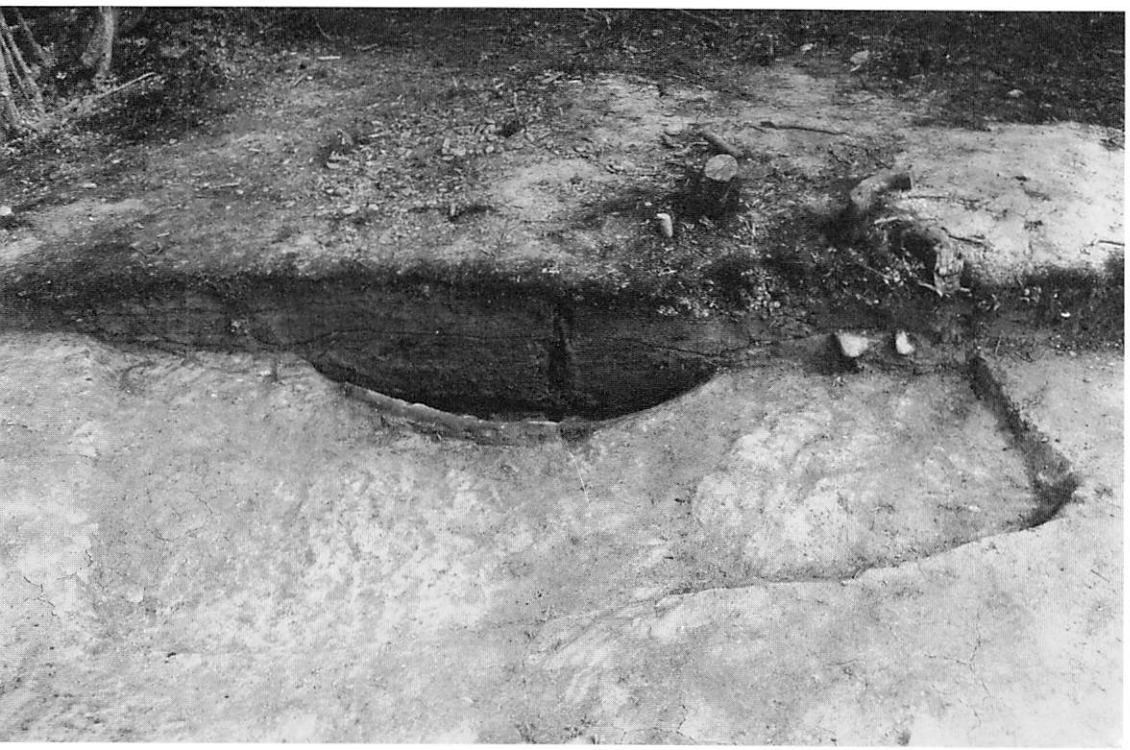


b　ＳＢ３土器出土状況
（29・31・32，南から）

c　同　　上
（29・31・32，東から）

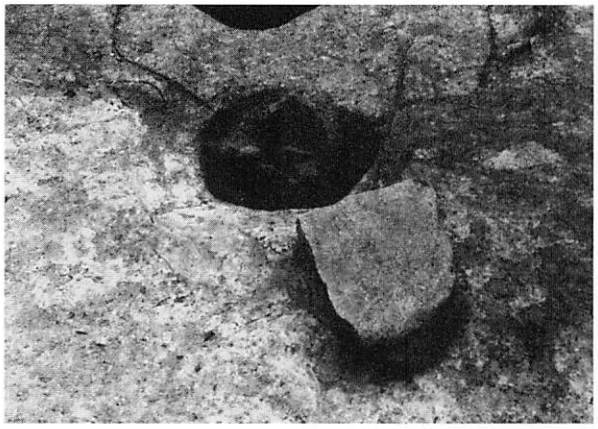
図版８

a　ＳＸ２（南から）

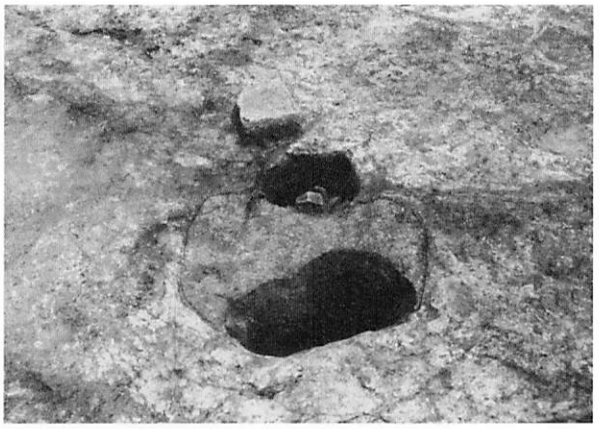


b　ＳＸ２（北から）

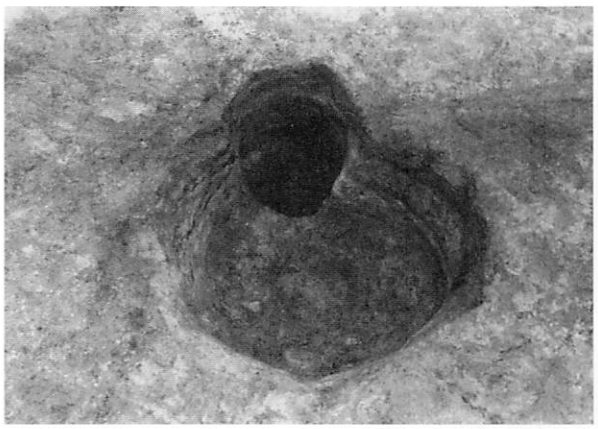
c　ＳＸ２土層（北から）



a　ＳＢ２Ｐ７礫出土状況（西から）

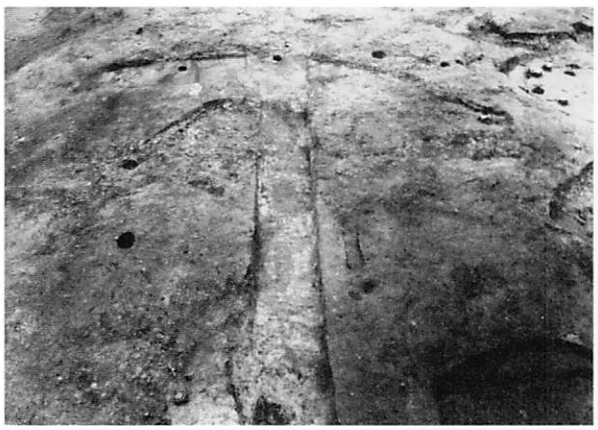


b　ＳＢ２Ｐ９検出状況（東から）



c　ＳＢ２Ｐ９完掘状況（東から）

d　ＳＢ３土器出土状況（33，南から）

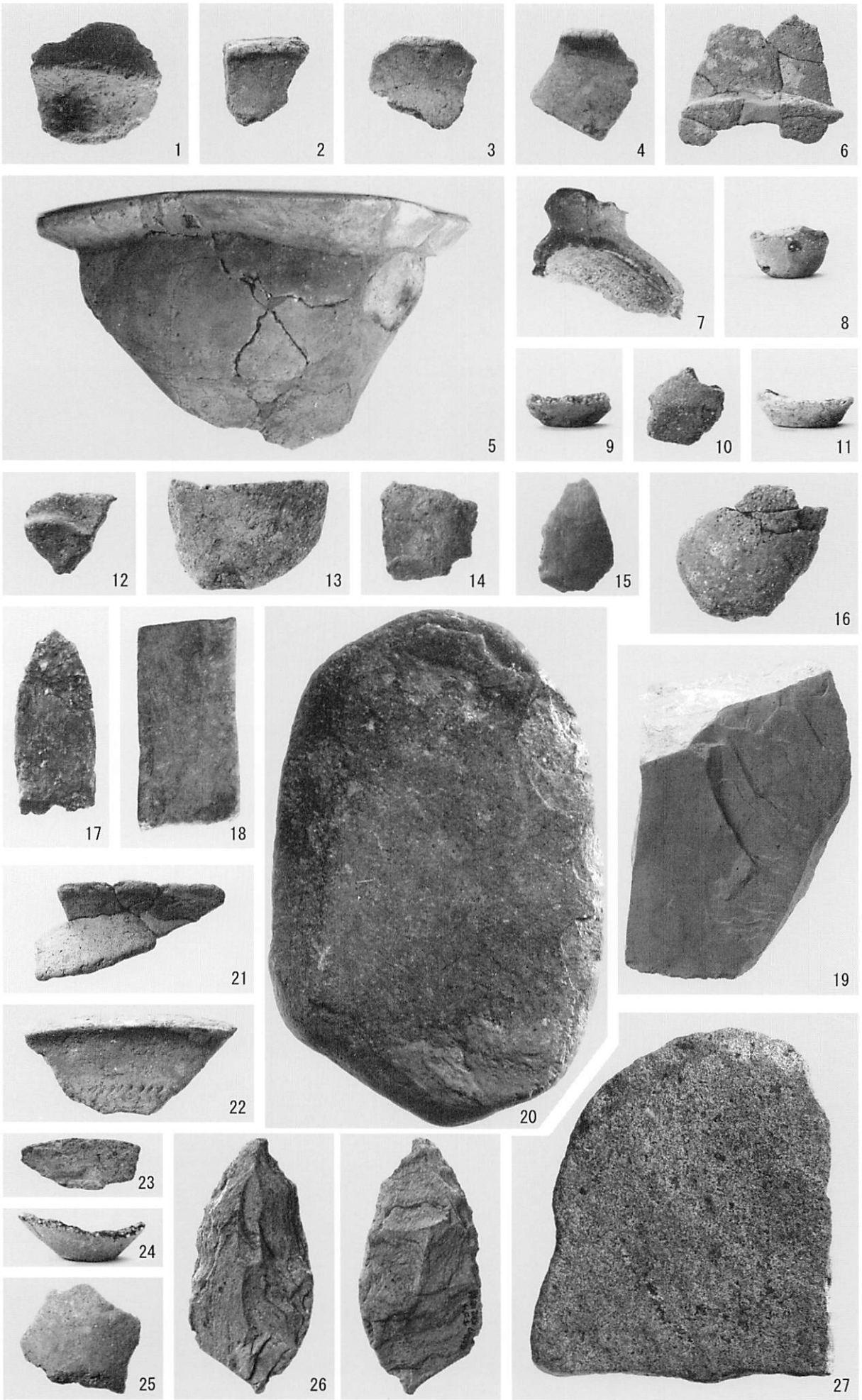


e　ＳＸ１（南から）

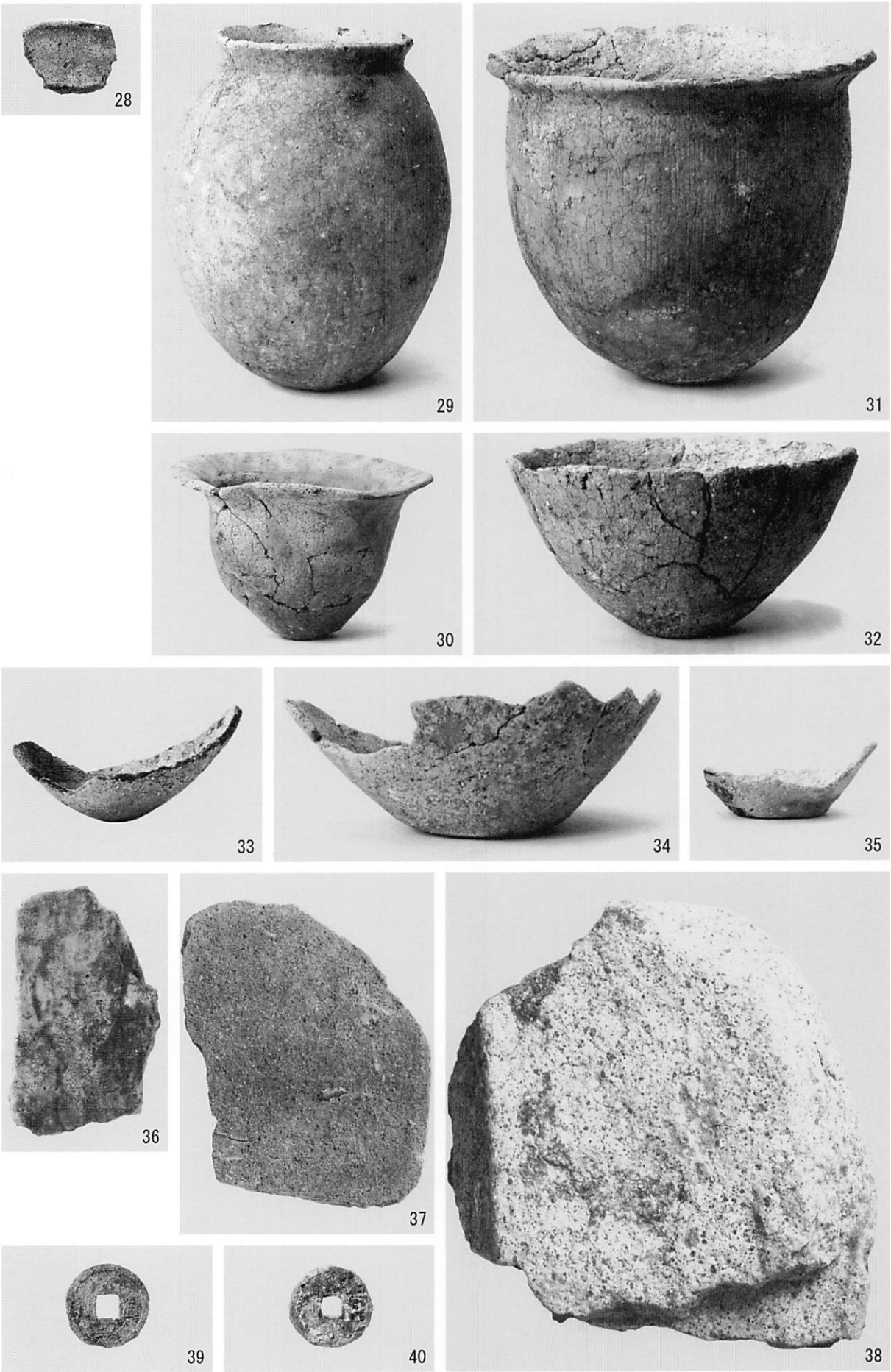
f　ＳＢ３土器出土状況（34，南から）

g　ＳＸ３・４（南から）

h　ＳＸ５（南から）



出土遺物(1)　1～20；ＳＢ１　21～27；ＳＢ２



出土遺物(2)　28～38；ＳＢ３　39・40；ＳＸ２

報告書抄録

ふりがな	しもごういせき
書名	下郷遺跡
副書名	東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	梅本健治
編集機関	財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦2004年2月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下郷遺跡（しもごういせき）	広島県（ひろしまけん） 東広島市（ひがしひろしまし） 西条町（さいじょうちょう） 大字馬木（おおあざうまき）	34212	949	34° 21′ 23″	132° 43′ 25″	20030407 ～ 20030523	1,000	東広島呉自動車道建設事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下郷遺跡	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡3軒 性格不明の遺構5基	弥生土器（甕・鉢），砥石，台石，スクレイパー，鉄鏃	

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第8集

下郷遺跡

東広島呉自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

発行日　平成16（2004）年2月27日

編集　財団法人　広島県教育事業団埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL（082）295-5751

発行　財団法人　広島県教育事業団
〒733-0011　広島市中区基町4番1号
TEL（082）228-8451

印刷所　至誠堂印刷株式会社